

○明治十六年十二月二十八日
達乙第百三十三號

恩給ヲ受クルノ權利ヲ有シタル者結婚出願スル時ハ陸軍武官結婚條例第十一條
第二項ニ基キ家計保護金ヲ納メシムルニ及ハサル儀ト可相心得此旨相達候事

○明治十九年七月三十日 各鎮監へ達
陸軍省達乙第三五二八號 府縣へハ令甲第三十五號

現役輜重輸卒ノ儀入營期日即四月二十日後ハ結婚不相成儀ニ候處自今諸兵同様
入營前ハ結婚スルヲ得此旨相達ス

但本年省令乙第四十號ニ據リ郷里ニ於テ服役ノ者ハ讀法式施行前亦本文ニ
同シ

○明治二十年十二月二十八日
達通第八五號次長ヨリ

陸軍武官結婚條例第九條但書ニ依リ公債證書ヲ以テ家計保護金ヲ納ムルトキ其
價格之儀ハ去ル明治十三年一月大藏省ヨリ各廳爲替方抵當之爲メ相達候價格ニ
據リ相納來候處其後國庫金出納規則發布相成隨テ右抵當價格モ消滅シ現今大藏
省ニ於テ別ニ實施之價格モ無之趣ニ付自今舊公債證書ハ實額其他之公債證書ハ
額面ニ據リ相納候様御取計相成度

○明治二十四年三月二日
陸軍省訓令乙第四號

陸軍武官結婚條例第十一條第二項ニ依リ家計保護金ヲ還附スルハ恩給ヲ受クル
ノ資格ヲ生シタル時期ニ於テスル儀ト心得ヘシ

○東京府實談 明治十七年三月十九日
火第三三四號

陸軍軍人結婚ノ儀ハ該條例ニ據リ許可ヲ不得ハ舉行難相成筈ノ處茲ニ尋常結婚
ノ例ニ依リ妻ノ送籍ヲナスモノアリ各區役所戸長役場ニ於テハ其配偶者ノ軍人
タルト否トヲ知ルニ由ナク現ニ送籍ヲナシ後チ軍人タルヲ以テ該條例ニ依リ身
元證書ヲ請フ者有之然ルニ軍人ハ將官及同等官ニ在テハ勅許ヲ仰キ准士官以上
ニ在テハ陸軍卿ノ許可ヲ請ケ下士以下ニ在テハ所管長官ノ許可ヲ請ケサレハ結
婚不相成儀ニ付當初軍人タルヲ告ケス其妻ノ送入籍ヲ申出タルハ素ヨリ順序ニ
違フタルモノニ付其結婚送入籍ハ無効ノモノトシ更ニ允許ヲ乞ハシメ可然哉差
掛リ伺出候向モ有之候間至急何分之御指揮有之度此段相伺候也

(指令) 同年四月十日

1993

桐之趣陸軍軍人タル者武官結婚條例ニ依ラスシテ結婚スヘキ筋無之萬一有之ニ於テハ其結婚無効ニ屬スルハ勿論之義ト可相心得事
但本文ノ如キ者有之候得ハ官姓名取調可申出候事

明治二十五年四月一日
陸軍省送乙第五九四號副官ヨリ

准士官以上結婚出願之節願書定例ノ書式ニ違ヒ或ハ娶ルヘキ婦人ノ名字ト身元證書ノ名字ト齟齬シ且結婚報告ニ在テモ巽ニ願書ノ名字ト相違ノ前々有之夫レカ爲メ手數ヲ煩スノミナラス往復ノ費用ニモ關係ヲ及ホス事不少候條向後右様之義無之様精々御注意有之度此段及御通牒候也

追テ本文願書中所管長官與書捺印脱漏之向モ有之候間是亦御注意有之度候也

明治三十一年一月二十四日
送乙第二〇七號副官ヨリ

武官結婚願書進達方之義ハ從來所管長官之添書ヲ付シ來候處該書面ニ在テハ所管長官ノ與書職印モ有之候ニ付自今ハ事務省路之爲メ添書ヲ付セス別紙書式ノ通本人願書(届出)ニ該官衙ノ送達番號並ニ年月日ヲ付シ進達相成候様致度尤將官同相當官ニ限リテハ是迄之通添書ヲ付シ候義ト御承知相成度此段及御通牒候也

送達番號
(各官衙ノ)
年 月 日

結婚願

使府縣國、、、、

何某何女(姉)(妹)

某

明治三十年四月八日
送乙第一二六六號副官ヨリ

准士官以上ニシテ陸軍武官結婚條例ニ依リ結婚願出許可済ノ上整婚届出之儀ハ一定ノ期限無之候得共願書ニシテ既ニ數年ヲ經過シ未タ整婚届出無之向モ有之右ニテハ自然行務上不整理ノ點モ有之候就テハ右願書之者ニ在テハ自今凡ソ三ヶ月以丙ニハ整婚之義届出候様御取計有之度此段及御通牒候也

1994

○陸軍軍人休暇規則

明治二十九年七月八日
陸軍部第十八號

陸軍軍人休暇規則別冊ノ通改正セラル

(別冊)

陸軍軍人休暇規則

第一條 軍人ノ休暇ヲ分テ二トス

一 賜與休暇

二 請願休暇

第二條 賜與休暇ハ左ノ如シ

一 定例休暇

二 慰勞休暇

三 褒賞休暇

第三條 定例休暇ハ軍隊又ハ校園ニ在リテハ隊務又ハ教育上支障ナキ時期ニ於テ毎年之ヲ賜與ス但夏期ニ於テ之ヲ與フルヲ例トス

前項ノ休暇ハ官廨ニ在リテハ毎年七月上旬ヨリ九月下旬マデノ間ニ於テ勤務ニ支障ナキ者ニ之ヲ賜與ス

定例休暇ノ日數左ノ如シ但シ此日數ハ數回ニ分割シテ賜與スルコトヲ得

准士官以上 三週日以内

下士 二週日以内

第四條 定例休暇ハ團隊長、官司ノ長ニ於テ部下掌務ノ緩急ヲ量リ便宜賜與ス

第五條 慰勞休暇ハ軍人演習等ノ爲メ山野ヲ跋渉シ又ハ新兵ノ教育ヲ完了シタル等其勞多キ者ニ臨時之ヲ賜與ス其賜與ノ權限左ノ如シ

上長官以上ヲ以テ充ツル團隊長、官司ノ長又ハ士官ヲ以テ充ツル獨立セル隊長

三日以内

士官ヲ以テ充ツル獨立セル隊長又ハ士官准士官ヲ以テ充ツル獨立セル隊長

一日

第六條 褒賞休暇ハ在營下士以下行狀方正勤務勉勵ニシテ且學術技藝ニ熟達シ他人ノ模範トナルヘキ者ニ臨時之ヲ賜與ス其賜與ノ權限左ノ如シ

團隊長 一ヶ月ニ 一日

第七條 請願休暇ハ左ノ如シ

一 准士官以上ハ歸省又ハ轉地療養其他事故アリテ休暇ヲ要スル時本人ノ願

1995

1996

ニ依リ之ヲ許可ス其日數ハ往復ヲ除キ四週日以内トス
二 下士以下ハ父母病氣又ハ死亡等ニテ歸郷ヲ要スルトキ親族ノ出願ニ依リ之ヲ許可ス其日數ハ往復ヲ除キ二週日以内トス
三 營外居住下士以下ニ在テハ前項ノ外醫師ノ診斷ニ依リ轉地療養ヲ要スルトキ本人ノ願ニ依リ之ヲ許可ス其日數ハ往復ヲ除キ四週日以内トス在營下士以下ノ轉地療養ノ規則ハ別ニ定ムル所ニ依ル
四 外國駐劄ノ諸隊ニ在テハ疾病ニ依リ轉地療養ヲ爲スモノ、外本條ノ休暇ヲ許ササルモノトス
第八條 歸省旅行中發病或ハ轉地療養中快復ニ至ラサル者ハ休暇ノ延期ヲ請願スルコトヲ得
第九條 將官並相當官ノ請願休暇ハ陸軍大臣ヨリ上奏裁可ヲ請フモノトス故ニ其願書ハ大臣ニ宛テ差出スヘシ但上官ノ下ニ在ル將官ハ該上官ヲ經由スヘシ
第十條 上長官以下ノ諸願休暇ハ左ニ掲クル諸官之ヲ許可ス其權限左ノ如シ
大臣並將官同相當官又ハ將官上長官ヲ以テ充ツル團隊ノ長官司ノ長、上長官又ハ上長官士官ヲ以テ充ツル獨立セル隊長並官司ノ長 四週間
上長官又ハ上長官士官ヲ以テ充ツル獨立セル隊長並官司ノ長、士官又ハ士官准士官ヲ以テ充ツル獨立セル隊長官司ノ長 二週間
並分屯隊長
第十一條 上長官以下休暇ヲ請願スルトキハ直屬ノ長ハ願出ヘシ直屬ノ長ニシテ休暇許可ノ權ヲ有スルモノハ其權限ニ由テ之ヲ許可シ其權ナキカ又ハ權限外ニ涉ル日數ナルトキハ順序ヲ經テ其權アル所屬上官ノ許可ヲ請ヒ其旨ヲ指令スヘシ
第十二條 各種ノ休暇ハ掌務繁劇ナルトキハ賜與又ハ許可セサルコトアルヘシ
第十三條 准士官以上ハ定例休暇中並慰勞休暇中トモ便宜歸省旅行等ヲ爲スコトヲ得但豫メ其行先ヲ直屬ノ長ヘ届出ヘシ
下士ニ在テハ定例休暇中ニ限リ官司ノ長若クハ直屬ノ長又ハ團隊長ノ許可ヲ得テ歸省旅行又ハ外泊ヲ爲スコトヲ得
外國駐劄ノ諸隊ニ在テハ本條ノ歸省旅行等ヲ許ササルモノトス

三九〇

第十四條 在營ノ下士以下休暇ヲ得テ在營スルトキハ勤務演習ヲ休業セシメ朝食後ヨリ日夕點呼前マテ外出ヲ許可スルコトヲ得

第十五條 一部隊ニ休暇ヲ與ヘタルトキヲ除クノ外下士以下休暇ヲ得テ外出スルトキハ外出免許札ヲ携持セシムヘシ

第十六條 轉地療養ノ爲メ休暇ヲ願フトキハ願書ニ陸軍醫官（醫官アラサルトキハ地方醫師）キハ地方醫師斷書ヲ添付スヘシ

第十七條 下士以下父母病氣又ハ死亡等ノ爲メ本人ノ歸郷ヲ願フトキハ親族ニ於テ願書ヲ作リ（病氣ナシハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ市町村長特別市制施行地ハ區長ノ與書證印ヲ受ケ本人所屬ノ軍隊又ハ官衙ニ差出シ之ヲ許可シタルトキハ其指令ハ本人ニ下付スヘシ）

第十八條 下士以下休暇ヲ得テ旅行スル者ニハ左式ノ休暇免許證ヲ付シテ之ヲ携帶セシメ服裝ハ略装トス

六寸

兵種隊號
官（卒職工）姓名
表
休暇免許證
職官姓名印

裏
一此證書ハ表記ノ者ニ休暇ヲ與フルノ證トス
一休暇日數何日（往復日數何日）
一何月何日何時何地出發
一何月何日何時何地歸著スヘシ
年月日

官司所屬ノ者ニ在テモ又之ニ準シテ調製付與スヘシ

第十九條 第八條ニ依リ休暇ノ延期ヲ出願セシトスル者ハ最初出願ノ手續ニ依リ更ニ出願シテ命ヲ待ツヘシ

途中發病又ハ船待川留雪支等ニテ不得已休暇日數ヲ超過スル場合ニ在テハ地方醫師ノ診斷書或ハ市町村長ノ證明書ヲ請ヒ歸著ノ上差出スヘシ

第二十條 此規則ニ於テ團隊長ト稱スルハ師團長以下各隊長警備隊司令官ヲ云ヒ官司ノ長ト稱スルハ官廳校團局課等ノ長官及參謀長ヲ云フ

附則

第二十一條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ在テハ本規則中市町村長ノ事務ハ區戶長ニ於テ取扱フモノトス

明治二十六年二月四日
陸軍省令第一三八號訓令

陸軍武官休暇之義ハ總テ陸軍軍人休暇規則ニ據ル儀ニ付遠隔ノ地ニ出張シ又ハ

1997

外國ヨリ歸朝候者ニ在テモ賜暇之限ニテラサルハ勿論ニ候處是迄往々明治三年八月二十九日太政官布告並ニ同六年九月十四日太政大臣ヨリ特命全權大使等ノ書來ニ據リ休暇シ得ルモノト心得候向キモ有之哉ニ相聞候ニ付爲念右及御通牒候也

明治二十三年七月八日
陸軍省令第二十二號

今般陸軍軍人休暇規則改正セラレ候ニ付テハ下士兵卒ノ休暇ニ關シ地方ニ係ル取扱及ヒ出願ノ手續等左ノ各項ニ據ル可シ

- 一 陸軍下士兵卒ノ父母病氣又ハ死亡等ノ爲メ本人ノ歸郷ヲ要スルトキハ往復ヲ除キ二週日以内ノ休暇ヲ許ス其休暇ヲ願フトキハ親族ニ於テ願書ヲ作リノ病氣ナレハ醫師ハ區長以下同シノ與書證印ヲ受ケ本人所屬ノ軍隊又ハ官衙ヘ宛差出スヘシ但當務繁劇ナルトキハ許可セサルコトアル可シ
- 一 前項ノ外下士ニ在テハ毎年二週日以内ノ休暇ヲ與ヘ歸郷又ハ旅行ヲ許スコトアリ又營外居住ノ下士兵卒ニハ轉地療養ヲ要スルトキ本人ノ願ニ依リ四週日以内ノ休暇ヲ許スコトアルヘシ
- 一 休暇ヲ得テ歸郷又ハ旅行中發病ノ爲メ出發シ難キトキハ延期ヲ願フコトヲ得其延期ヲ願フトキハ本人又ハ親族ニ於テ願書ヲ作リ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ市町村長ノ與書證印ヲ受ケ本人所屬ノ軍隊又ハ官衙ヘ宛差出スヘシ
- 一 休暇ヲ得テ歸郷又ハ旅行ノ者如何ナル事故ニ遭遇スルモ前項ノ場合ヲ除ク外休暇日數ヲ延ハスコトヲ許サス
- 一 途中發病川留船待雪支等ニテ休暇日數ヲ超過スルトキハ醫師ノ診斷書或ハ市町村長ノ證明書ヲ請ヒ歸著ノ上差出スモノトス
- 一 休暇ヲ得テ歸郷又ハ旅行スル者ハ左式ノ休暇免許證ヲ携帯シ陸軍定制ノ服ヲ著ス

六寸

兵種隊號(所管)	宣兵卒職工姓名
休暇免許證 陸軍省令第二十二號	
職官姓名印	
裏 一 此證書ハ表記ノ者ニ休暇ヲ與フルノ證トス 一 休暇日數何日(往復日數何日) 一 何月何日何時何地出發 一 何月何日何時何地歸著スヘシ 年月日	

1998

一 市町村制ヲ實施セサル地方ニ在テハ市町村長ノ職務ハ區長又ハ戶長ニ於テ取扱フヘシ

○陸軍監獄看守休暇規則

明治二十七年七月四日
陸軍第六十八號

陸軍監獄看守休暇規則左ノ通定ム

陸軍監獄看守休暇規則

第一條 陸軍監獄看守ニハ慰勞ノ爲休暇ヲ與ルコトヲ得

第二條 慰勞休暇ノ日數ハ滿十二個月皆勤ノ者ハ三週間滿六個月皆勤ノ者ハ一週間トス但六個月皆勤休暇ヲ爲シタル者仍六個月皆勤シタルトキ其休暇日數ハ前後通算シテ三週間トス

第三條 職務ニ由リ負傷シ若クハ疾病ニ罹リ治療中及豫備後備役ニ在ル者召集中ハ勤務日數ニ通算シ父母祭日忌中休務及慰勞休暇中ハ其日數ヲ控除シテ前後勤務ノ日數ヲ通算ス

第四條 慰勞休暇ハ勤務ニ差支ナキ時ニ於テ陸軍監獄長之ヲ許スヘシ

第五條 陸軍監獄看守ニハ父母祭日忌中休務ノ外日曜其他一般ノ休日ト雖モ休暇ヲ許ナス但歸省若クハ轉地療養其他休暇ヲ要スルトキハ陸軍文官諸願休暇手續ニ依ルヘシ

○陸軍軍人軍屬歸郷療養者取扱規則

明治二十七年十二月十四日
陸軍第四百四十號

陸軍軍人軍屬歸郷療養者取扱規則左ノ通定メラル

陸軍軍人軍屬歸郷療養者取扱規則

第一條 陸軍軍人軍屬ニシテ戰役ニ從事シ傷疾ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル者ハ陸軍病院ニ於テ治療ノ後其狀況ニ由リ休暇ヲ與ヘ歸郷療養ヲ爲サシムルコトヲ得

第二條 陸軍病院長歸郷療養ヲ必要ト認ムル者アルトキハ歸郷期日ヲ豫定シ師團長ニ具狀シ師團長ハ之ニ休暇ヲ與ヘ歸郷療養ヲ爲サシムヘシ但歸郷療養者ノ師團ニ屬セサル者ハ其本屬長官ニ通報スルモノトス

1999

第三條 師團長ハ必要ノ時期ニ於テ歸郷療養者ヲ便宜ノ地ニ召喚シ軍醫ヲシテ傷疾疾病ノ輕重ヲ實査シ傷項ヲ策定セシムヘシ他ノ師管ニ寄留ノ者ニ在テハ其地所管ノ師團長ニ於テ本條ノ取扱ヲ爲スモノトス

第四條 傷疾疾病ニ依リ召喚ニ應シ難キ者アルトキハ軍醫ヲ派遣シ前條ノ取扱ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第五條 豫備後備ノ軍人ハ傷項策定後期日ヲ指定シ召集ヲ解除スヘシ但退役若クハ常備後備役免除ニ屬スル者ハ其處分同時ニ召集ヲ解除スヘシ

其休暇ハ召集解除ノ日ヲ以テ終期トス

○陸軍文官請願休暇手續

明治二十一年六月二十八日
陸軍省令第四十一號

陸軍出仕文官請願休暇ノ手續左之通定ム
但明治十八年達乙第百十四號達ハ廢止ス

- 一 凡ソ陸軍出仕ノ文官歸省又ハ他行轉地療養其他事故アリテ休暇ヲ要スルトキハ左ノ項目ニ依ル
 - 一 休暇日數高等官ハ往復ヲ除キ四週日判任官ハ三週日ハ四週日以内ノ休暇ヲ請願スルコトヲ得但轉地療養日限内快復ニ至ラサル者及休暇中發病ノ者ハ延期ヲ願フコトヲ得
 - 二 勅任官ノ休暇ハ陸軍大臣ヘ請願スヘシ
 - 三 奏任官以下ノ休暇ハ各長官ニ於テ許可スヘシ但本省各局出仕ノ奏任官ハ其長^{總務局長}ヨリ總務局長ノ認可ヲ得テ許可スヘシ
 - 三 凡ソ休暇ノ願ハ其要スル旨趣及ヒ日數ヲ記載シ差出スヘシ

○暑中午後練兵休止

明治二十一年八月二十八日
陸軍省達乙第二八〇七號

近衛、師團

暑中午後練兵休止日數伸縮方ノ義是迄年々其ノ期ニ際シ伺出相成來候處自今於其師團適宜取計可有之候也

○陸軍文官暑中休暇賜與方

明治二十一年六月二十八日
陸達第四百四十二號

陸軍出任之文官暑中休暇賜與之義左之通定ム

- 一 休暇日數ハ休暇期中ニ於テ二十日以内トス
- 二 毎局部課共一時ニ休暇スルヲ許サス總人員三分一以内タルヘシ
- 三 休暇日割等ハ豫メ其長官ノ認可ヲ受ケ休暇中他行スル者ハ其行先ヲ届出ヘシ
- 四 局部課等ノ都合ニ依リ二十日以内ノ日數ヲ數回ニ分チ休暇スルモ妨ケナシ
- 五 事務繁劇ノトキ若クハ臨時須要之件ヲ擔任スル者ニ在テハ休暇ヲ許可セサルコトアルヘシ
- 六 暑中休暇下賜及時期ハ年々内閣ヨリ官報ヲ以テ達相成筈ニ付自今當省ヨリハ別ニ達セス

○陸軍軍人軍屬喪服
父母祭日休務規則

明治十三年十月九日
陸乙第六十五號

改正
明治十四年三月
陸乙第一四號
明治二十一年十月
陸達第一九三號
明治二十七年四月
陸達第三六號

陸軍軍人軍屬喪服父母祭日休務規則別冊之通改正候條此旨相達候事
(別冊)

陸軍軍人軍屬喪服父母祭日休務規則

- 第一條 陸軍軍人軍屬喪服ノ節ハ忌中休務表ニ掲クル日數ノ外休務ヲ許サス其日數滿シハ自カラ申報シテ除服本務ニ服スヘシ
- 第二條 本務繁劇ナル時ハ休務ノ日數未タ滿タスト雖モ其所屬長官除服出務ヲ命スルヲ得ヘシ
- 第三條 諸生徒及ヒ軍隊附下士兵卒父母ノ喪ニ遭フ者ハ一日ノ休務ヲ許シ其餘ノ忌服ニ於テハ休務ヲ許スコトナシ
- 第四條 歸休兵及ヒ豫備役後備役ノ籍ニ在ル者忌服中ト雖モ召集ノ時ニ當テハ

2001

考 備		五	十	十	二	三	五	定	忌	休	務	日	數
定忌三日以下ノ忌服ニ於テハ休務ヲ許スコトナシ 音計ヲ聞クノ日ニ表裏ノ休務日數ヲ若干日經過スルトキハ殘ル日數ヲ休務スヘシ 父母ノ喪ニ限リ其計音ヲ聞クノ日ヨリ表裏ノ日數ヲ休務スヘシ		日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
		二	四	五	七	十	十	五	十	十	五	十	十
		日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日

ハ直チニ除服其召集ニ應スヘシ

第五條 戰時若クハ非常戒嚴等ノ時ニ在テハ父母ノ喪ト雖モ休務ヲ許サス

第六條 除服本務ニ服スル者ハ喪章ヲ除キ朝賀參拜等懽カルム及ハス忌服中休務ヲ許サ、ル者モ亦同シ

第七條 軍人軍屬父母ノ祭日ニハ休暇ヲ許ス然レモ本務繁劇ナル時ハ之ヲ許サ、ルコトアルヲ以テ祭日前其直屬長ニ申請スヘシ

但諸生徒並ニ生兵ハ休暇ヲ許サス

第八條 創除

第九條 戰時若クハ非常戒嚴等ノ時ニ在テハ父母祭日ニ當ルト雖モ休務ヲ許サス

陸軍軍人軍屬忌中休務表

2002

2005

○陸軍文官誓文法

明治十四年二月八日
達乙第四號

諸官員始メテ拜命就職ノ前誓文調印ノ儀去ル明治五年二月中相達置候處右誓文
料紙ノ儀ハ自今相廢候條各所管ニ於テ別紙雛形ノ通誓文帖ヲ製シ首ニ誓文ヲ掲
ケ置キ拜命ノ者有之毎ニ所管長官ノ面前ニ於テ誓文讀讀ノ上調印可爲致此旨相
達候事

但本文誓文ノ儀ハ判任官以上ト有之候處右ハ御用掛准奏判任モ同様ノ儀ト可
相心得事

(別紙)

雛形 料紙美濃野紙

此度當職拜命仕候ニ就テハ職分ノ爲メヘキ所ニ於テハ心方ヲ盡シ鞠躬勉勵仕
リ且又陸軍法例ノ條件一々遵奉事務ニ服行シ聊モ忽略スルコトナク 公務ノ
事件ハ大小トナク家族懇友タリトモ洩露仕ル間敷萬一相背クニ於テハ如何ナ
ル嚴科ニ處セラルトモ絶テ申分無之候仍テ調印如件

年號月日

官 姓 名 印

全 全

全 全

○軍人軍屬讀法

明治十五年三月九日
達乙第十六號

從來相用來候讀法之儀別冊之通改正候條此旨相達候事

但軍屬讀法ハ給仕用使小使其他宣誓ヲ爲サ、ル者ニ相用候儀ト可相心得事

(別冊)

軍人軍屬讀法

軍人讀法

兵隊ハ皇威ヲ發揚シ國家ヲ保護スル爲メニ設ケ置カル、モノナレハ此兵
員ニ加ル者ハ堅ク左ノ條件ヲ守リ違背スヘカラス

第一條 誠心ヲ本トシ忠節ヲ盡シ不信不忠ノ所爲アルヘカラサル事
第二條 長上ニ敬禮ヲ盡シ等輩ニ信義ヲ致シ粗暴倨傲ノ所爲アルヘカラサル事

第三條 長上ノ命令ハ其事ノ如何ヲ問ハス直ニ之ニ服従シ抵抗干犯ノ所爲アルヘカサル事

第四條 膽勇ヲ尙トシ軍務ニ勉勵シ恐怯柔懦ノ所爲アルヘカサル事
第五條 血氣ノ小勇ニ誇リ爭鬪ヲ好ミ他人ヲ侮慢シ世人ノ厭忌ヲ來ス等ノ所爲アルヘカサル事

第六條 道徳ヲ修メ資素ヲ主トシ浮華文弱ニ流ル、等ノ所爲アルヘカサル事
第七條 名譽ヲ尙トシ廉耻ヲ重シ賤劣貪汚ノ所爲アルヘカサル事

以上掲クル所ノ外法律規則ニ違犯シ罪ヲ國家ニ得ルニ至テハ父祖ヲ辱シメ家聲ヲ汚シ醜ヲ後世ニ遺ス獨リ其身現在ノ耻辱ノミナラザルナリ況ンヤ重罪ノ如キハ各人天賦ノ公權ヲ剝奪セラレ世ニ立チ人ニ接ルモ總テ對等ノ權利ヲ得サルニ至ルニ於テ又名譽ヲ尙トシ廉耻ヲ重シズルノ軍人ニ在テハ殊ニ戒慎ヲ加ヘサルヘカラス就中陸軍刑法ハ軍隊ノ害ヲ爲ス者ヲ懲ス爲メニ特ニ設ケラル、モノタルヲ以テ其刑亦頗ル嚴ナリ軍人ニシテ之ヲ犯セハ當ニ本分ヲ誤リ軍隊ノ安寧ヲ害スルノミナラス遂ニ世人ノ信用ヲ損シ陸軍ノ榮譽ヲ汚ス等其實更ニ重シ平素自ラ戒飭シ決シテ違犯スヘカサルモノ也

軍屬誡法

此讀法ノ式ヲ受ケ陸軍ニ從事スル者ハ即チ軍屬ト稱シ軍人ト相須テ陸軍ノ用ニ供セラル、者タルニヨリ堅ク左ノ條件ヲ守リ決シテ違背ス可ラス

第一條 誠心ヲ本トシ忠實ヲ盡シ勤務ニ勉勵スヘキ事

第二條 長上ニ敬禮ヲ盡シ等輩ニ親睦ヲ旨トスヘキ事

第三條 長上ノ命令ハ其事ノ如何ヲ問ハス直ニ服従スヘキ事

第四條 言行ヲ慎ミ質素ヲ尙フヘキ事

以上掲クル所ノ外法律規則ニ違ヒ罪ヲ犯スニ至テハ父祖ヲ辱シメ醜ヲ百世ニ遺ス獨リ其身現在ノ耻辱ノミナラサルナリ殊ニ重罪ノ如キハ各人天賦ノ公權ヲ剝奪セラレ世ニ立チ人ニ接ルモ總テ對等ノ權利ヲ得サルニ至ル就中陸軍刑法ハ特ニ陸軍ノ害ヲ爲ス者ヲ懲ス爲メニ設ケラル、モノタルヲ以テ其刑亦頗ル嚴ナリ平素自ラ戒飭シ決シテ違犯スヘカサルモノ也

各官廳執務時間

明治二十五年十一月二十二日
閣令第六號

改正 明治二十六年一月
閣令第一號
加除 明治二十八年十一月
閣令第六號

各官廳執務時間自今左ノ通改定ス

2006

九月十一日ヨリ十月三十一日迄

午前八時ヨリ午後四時ニ至ル

十一月一日ヨリ翌年二月末日迄

午前九時ヨリ午後四時ニ至ル

三月一日ヨリ七月十日迄

午前八時ヨリ午後四時ニ至ル

七月十一日ヨリ九月十日迄

午前八時ヨリ午後十二時ニ至ル

但土曜日日曜日は従前ノ通

地方ノ状況又ハ職務ノ性質上止ムヲ得タルモノニ限り主務大臣ハ閣議ヲ經テ右
時間ノ繰替ヲ爲スコトヲ得

事務繁劇ノ場合ニ於テハ上官ノ指揮ニ依リ晝夜ニ拘ハラス執務スヘシ

軍機保護法

明治三十二年七月十四日
法律第百四號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル軍機保護法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

軍機保護法

第一條 軍机上祕密ノ事項又ハ圖書物件タルコトヲ知テ之ヲ探知收集シタル者
ハ重懲役ニ處シ其ノ情輕キ者ハ一等ヲ減ス

第二條 職務ニ因リ軍机上祕密ノ事項又ハ圖書物件ヲ知得領有シタル者其ノ祕
密タルコトヲ知テ之ヲ他人ニ漏洩交付シ若ハ之ヲ公示シタルトキハ有期徒刑
ニ處ス

第三條 偶然ノ理由ニ因リ軍机上祕密ノ事項又ハ圖書物件ヲ知得領有シタル者
其ノ祕密タルコトヲ知テ之ヲ他人ニ傳説交付シ若ハ之ヲ公示シタルトキハ輕
懲役ニ處ス

第四條 許可ヲ得スシテ軍港要港防禦港又ハ堡壘砲臺水雷術所其ノ他國防ノ爲
建設シタル諸般ノ防禦營造物ヲ測量撰寫攝影シ又ハ其ノ狀況ヲ錄取シタル者
ハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五條 許可ヲ得ス又ハ詐僞ノ所爲ニ因リ許可ヲ得テ堡壘砲臺水雷術所其ノ他
國防ノ爲建設シタル諸般ノ防禦營造物内ニ入リタル者亦前條ノ例ニ同シ

第六條 本法ニ規定シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケタル者ハ未遂犯罪ノ例
ニ照シテ處斷ス

第七條 本法ノ罪ヲ犯サントシテ其ノ豫備ヲ爲シタル者ハ同條ノ刑ニ照シ二等又ハ
三等ヲ減ス

第七條 本法ノ罪ヲ犯シ因テ財物ヲ得タル者ハ其ノ財物ヲ沒收シ既ニ費消シタ

2007

ル下キハ其ノ價額ヲ追徴ス
第八條 本法ハ刑法第二編第二章第二節外患ニ關スル罪陸軍刑法第二編第一章
反亂ノ罪海軍刑法第二編第一章反亂ノ罪ニ關スル規定ノ効力ヲ妨ケズ

要塞地帶法

明治三十二年七月十四日
法律第五百五號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル要塞地帶法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一章 總則

第一條 要塞地帶トハ國防ノ爲建設シタル諸般ノ防禦營造物ノ周圍ノ區域ヲ云フ

第二條 要塞地帶ノ幅員ハ防禦營造物ノ各突出部ヲ連結スル線ヲ基線トシ此ノ
線ヨリ外方一定ノ距離以內ニ於テ之ヲ定ム

第三條 要塞地帶ハ陸地ト海面トヲ問ハス之ヲ三區ニ分チ各區ノ幅員ハ左ノ區
別ニ從ヒ陸軍大臣之ヲ定メ並ニ之ヲ告示ス其ノ之ヲ變更スル場合亦同シ但シ陸
軍防禦營造物ノ地帶及第七條第二項ノ區域カ海軍防禦營造物ノ地帶及第七條
第二項ノ區域ト相關聯スルカ或ハ軍港要港又ハ海軍用地ニ係ル場合並陸軍用
地カ海軍防禦營造物ノ地帶及第七條第二項ノ區域ト相關聯スル場合ニ於テハ
陸軍大臣海軍大臣協議ノ上之ヲ定メ連署シテ告示ヲ爲スコトヲ要ス

第一區 基線ヨリ測リ二百五十間以內及基線ト防禦營造物間ノ區域

第二區 基線ヨリ測リ七百五十間以內

第三區 基線ヨリ測リ二千二百五十間以內

第四條 要塞司令官鎮守府司令長官要港部司令官及築城部本部長ハ要塞地帶ヲ
劃スル爲其ノ他必要ト認ムル場合ニ於テハ部下官僚ヲシテ要塞地帶內及第七
條第二項ノ區域內何レノ地ヲ問ハス出入セシムルコトヲ得但シ陸海軍用地內
ニ出入セシメントスルトキハ互ニ當該官廳ノ承認ヲ經ヘシ

第五條 陸軍防禦營造物ノ地帶及第七條第二項ノ區域ニ關聯セサル海軍防禦營
造物ノ地帶及第七條第二項ノ區域內ニ關シテハ此ノ法律ニ規定スル陸軍大臣
ノ職務ハ海軍大臣之ヲ行ヒ要塞司令官ノ職務ハ鎮守府司令長官要港部司令官
之ヲ行フ

第六條 此ノ法律ハ防禦營造物ノ設ナシト雖之ヲ設クルコトニ決定シタル箇所
ニ於テ其ノ豫定防禦營造物ノ各突出部ヲ連結スル線ヲ基線トシ第二條第三條
及第七條第二項ニ定メタル區域ニ付テ亦之ヲ適用ス但シ基線以內ノ區域ハ第

一區ニ準ス

第二章 禁止及制限

第七條 何人ト雖要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ要塞地帯内水陸ノ形狀ヲ測量、攝影、模寫、錄取スルコトヲ得ス

前項ノ規定ハ要塞地帯外ト雖第三區ノ境界線ヨリ外方三千五百間以内ノ區域ニ於テ之ヲ適用ス

第八條 要塞司令官ハ要塞地帯内ニ入リ兵備ノ狀況其ノ他地形等ヲ觀察スル者ト認メタルトキハ之ヲ要塞地帯外ニ退去セシムルコトヲ得

第九條 要塞地帯ノ第一區ニ屬スル水面ニ在リテハ要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ漁獵、採藻及艦船ノ繫泊、土砂ノ掘鑿ヲ爲スコトヲ得ス

第十條 第一區内ニ於テ新設スルコトヲ得サルモノ左ノ如シ
一 不燃質物ヲ以テ築造セル家屋及倉庫
二 浴室及固定竈爐

三 不燃質物ヲ以テ築造セル高サ二尺ヲ超ユル諸般ノ築造物
第十一條 第一區内ニ於テ要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ新設スルコトヲ得サルモノ左ノ如シ

一 埋葬地

二 水車及風車

三 井
四 容易ニ他ニ移動スヘカラサル器械器具ヲ備フル家屋

五 生垣及木造ノ圍牆
六 第十條第一號ニ於テ禁セサル家屋及倉庫

第十二條 第二區内ニ於テ要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ新設スルコトヲ得サルモノ左ノ如シ
一 不燃質物ヲ以テ築造セル家屋及倉庫

二 埋葬地
三 不燃質物ヲ以テ築造セル高サ二尺ヲ超ユル諸般ノ築造物

第十三條 第一區第二區内ニ於テ要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ屋内ト屋外トヲ問ハス累積スルコトヲ得サルモノ左ノ如シ

一 第一區内ニ於テハ高サ五尺、第二區内ニ於テハ高サ八尺以上ニ累積スル不燃質物及石炭類

二 第一區内ニ於テハ高サ一丈三尺、第二區内ニ於テハ高サ一丈七尺以上ニ

2009

累積スル薪炭及竹木材

第十四條 第一區第二區內ニ於テハ要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ家屋倉庫及諸般ノ築造物ヲ改築増築スルコトヲ得ス

第十五條 各區內ニ於テ要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ新設若ハ變更スルコトヲ得サルモノ左ノ如シ

一 地表ノ高低ヲ永久ニ變更スル土工即チ堆土、開鑿等

二 溝渠、鹽田、排水及灌水

三 公園、青樹場、竹木林、菓園及桑茶畑

四 耕作地

第十六條 各區內ニ於テ陸軍大臣ノ許可ヲ得ルニ非サレハ新設若ハ變更スルコトヲ得サルモノ左ノ如シ

堤塘、運河、道路、橋梁、鐵道、隧道、永久棧橋

第十七條 本章ノ禁止制限ニ違背シ新設改築増築變更シタル家屋倉庫其ノ他ノ築造物又ハ累積物等ハ違背者ヲシテ期限ヲ定メテ之ヲ除去セシメ地形ノ變更ニ係ルモノハ之ヲ復舊セシメ期限內ニ除去復舊セサルトキ若ハ其ノ期限內ニ終了スルノ見込ナキトキ又ハ其ノ方法宜シキヲ得サルトキハ官廳ニ於テ自ラ之ヲ執行シ又ハ第三者ヲシテ之ヲ執行セシメ其ノ費用ヲ義務者ヨリ徵收スルコトヲ得

前項義務者ニ於テ負擔スヘキ費用ハ國稅ノ滯納處分ニ關スル規定ニ依リ之ヲ徵收スルコトヲ得但シ政府ハ國稅ニ次キ先取權ヲ有ス

本條ノ處分ハ第十六條ノ違背者ニ就テハ陸軍大臣之ヲ爲シ其ノ他ノ違背者ニ就テハ要塞司令官之ヲ爲スヘシ

第十八條 地帶ノ禁止制限ニ關シ官廳ノ處分ニ服セサル者ハ其ノ處分ニ就テノ告示又ハ通達ヲ受タル日ヨリ三十日以内ニ陸軍大臣ニ訴願スルコトヲ得但シ訴願中處分ノ執行ヲ妨ケス

第十九條 陸軍大臣ハ場合ニ依リ或區域內ニ限リ特ニ本章禁止制限ノ全部若ハ一部ヲ解除スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ解除ノ事項及其ノ區域ヲ告示ス之ヲ變更スルトキ亦同シ

第二十條 本章ノ禁止及制限ハ陸海軍又ハ陸海軍官廳ノ行動又ハ施設ニ對シテハ之ヲ適用セス但シ陸軍防禦營造物ノ地帶及第七條第二項ノ區域ニシテ海軍防禦營造物ノ地帶及第七條第二項ノ區域ト相關聯スル場合若ハ軍港要港又ハ海軍用地ニ係ル場合並陸軍用地カ海軍防禦營造物ノ地帶及第七條第二項ノ區

2010

域下相關聯スル場合ニ於テ當該陸軍官廳若ハ海軍官廳カ此ノ法律ニ掲クル許
可又ハ承認ヲ爲シ若ハ第十九條ノ處分ヲ爲サントスルトキハ陸軍官廳ハ當該

海軍官廳ニ海軍官廳ハ當該陸軍官廳ニ協議スルコトヲ要ス

第二十一條 陸軍以外ノ官廳ニ於テ第七條第九條第十一條乃至第十五條ニ掲
クル事項ヲ爲サントスルトキハ要塞司令官ノ承認第十六條ニ掲クル事項ヲ爲
サントスルトキハ陸軍大臣ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス

第三章 罰則

第二十二條 第七條及第九條ノ禁ヲ犯シタル者ハ一年以上二年以下ノ重禁錮
又ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス第八條ニ依リ要塞司令官ニ退去ヲ命ゼ
ラレ其ノ命ニ從ハサル者亦同シ

第二十三條 第七條及第九條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ
例ニ照シテ處斷ス

第二十四條 第十一條乃至第十三條第十五條及第十六條ニ違犯シタル者ハ二圓以
上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十五條 第十四條ニ違犯シタル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處
ス

第二十六條 要塞地帯各區及第七條第二項ノ區域ヲ標示スル爲ニ設ケタル標
石、標木、標札ノ類ヲ移轉シ又ハ之ヲ毀壞シタル者ハ一年以上二月以下ノ重
禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ過失ニ出ラタル者ハ五
錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第四章 雜則

第二十七條 要塞地帯創設告示ノ當時家屋倉庫建築物等ノ新設、變更、改築、増
築中ニ係ルモノハ此ノ法律ヲ禁止制限ヲ適用セス

第二十八條 要塞地帯各區及第七條第二項ノ區域ヲ標示スル標石、標木若ハ標
札ノ類ヲ建設スル爲ニ要スル敷地ノ買収及使用ニ關シテハ明治二十三年法律
第二十三號陸地測量條例ノ規定ヲ準用ス

第二十九條 此ノ法律ノ施行ニ關シ必要ナル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

附 則

第三十條 此ノ法律ハ軍港規則及要港規則ノ効力ヲ妨クルコトナシ
第三十一條 明治三十一年勅令第百七十六號ハ此ノ法律ニ依リ第三條又ハ第六
條ノ告示ヲ爲シタル箇所ニ限リ其ノ効力ヲ失フ

○要塞地帯法施行規則

明治三十二年八月十一日
陸軍省令第百二十二號

要塞地帯法施行規則左ノ通定ム

要塞地帯法施行規則

第一條 本法第七條第九條第十一條乃至第十三條及第十五條ニ依リ許可ヲ得ム
トスル者ハ左ニ掲クル事項ヲ詳記シ所轄市町村長ノ與書ヲ得テ當該要塞司令
官ニ願出ヘシ、

但シ府縣、郡、市、町、村水利組合其他公共團體ヨリ出願スル場合若クハ本令
第三條ノ場合ニハ所轄市町村長ノ與書ヲ要セス

一 本法第七條ニ掲クルモノニ在リテハ其ノ目的、區域及期限

二 本法第九條ニ掲クルモノニ在リテハ漁獵、採藻ノ區域及期限、艦船繫泊ノ
位置及期限、土砂掘鑿ノ區域、方法及期限

三 本法第十一條第六號及第十二條第一號ニ掲クルモノニ在リテハ建築ノ位
置、設計、建築材料ノ種類及落成ノ期日

四 本法第十一條第一號乃至第五號及第十二條第二號ニ掲クルモノニ在リテ
ハ其位置、設計及落成ノ期日但シ本法第十一條第四號ニ掲クルモノニ在
リテハ其ノ器械器具設備ノ設計及其ノ位置共

五 本法第十二條第三號ニ掲クルモノニ在リテハ建築物ノ目的、設計、位置及
落成ノ期日

六 本法第十三條ニ掲クルモノニ在リテハ累積ノ目的、位置、累積物ノ種類及
累積ノ高さ並ニ期間

七 本法第十五條ニ掲クルモノニ在リテハ作業ノ目的、位置、設計及落成ノ期
日

本法第十四條ニ依リ改築増築ノ場合ハ前項ニ準ス

第二條 本法第十六條ニ依リ新設若ハ變更ノ許可ヲ得ムトスルモノハ工事ノ種
類、設計及落成ノ期日ヲ詳記シ地方長官ノ證明ヲ受ケ當該要塞司令官ヲ經由
シテ陸軍大臣ニ願出ヘシ

第三條 本法ニ依リ陸軍大臣又ハ要塞司令官ノ許可ヲ受クヘキ事項ニシテ別ニ
法律命令ノ規定ニ依リ主務官廳ノ許可ヲ要スルモノハ先ツ其ノ許可ヲ受ケ其
ノ許可書ヲ原本ヲ添付スルヲ要ス

第四條 府縣、郡、市、町村、水利組合、其他公共團體並ニ社團法人ニ在リテハ其
ノ代表者ヨリ願出ヘシ

第五條 陸軍大臣又ハ要塞司令官ノ許可ヲ得タル事項ヲ變更セムトスルトキハ

2012

前諸條ニ準シテ更ニ許可ヲ受クヘシ
第六條 陸軍大臣又ハ要塞司令官ニ於テ許可ヲ與ヘタルトキハ許可證ヲ交付ス

ヘシ
前項ノ證標ハ作業ヲ實施スル者必ス携帯シ何時ニテモ憲兵、衛戍服務ノ軍人及警察官吏ノ閱覽ニ供スヘシ其ノ許可ヲ受ケタル期限滿ツレハ直ニ返却スヘシ

第七條 許可ヲ受ケタル作業者ハ作業ノ場所ニ許可證ノ旨ヲ記載シタル標札ノ類ヲ掲クヘシ但シ本法第七條及第九條ニ掲クルモノニ在リテハ此ノ限リニアラス

第八條 許可證ヲ所持スヘキモノニシテ當該官ノ閱覽ヲ拒ミタル者ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス許可ノ期限滿了後七日以内ニ許可證ヲ返納セサル者亦同シ

第九條 本法第七條ニ掲クルモノ、中港灣ニ出入スル艦船ノ航路測量ニ限り許可ヲ受クルヲ要セス

第十條 本法ニ於テ不燃質物ノ家屋倉庫及其他ノ築造物ト稱スルハ金屬造、煉瓦造、石造、土造及之ニ準スヘキ者ヲ云フ

第十一條 本法第十六條ニ於テ道路ト稱スルハ國道、縣道及道幅三間以上ノモノヲ云ヒ橋梁ト稱スルハ此等ノ路線ヲ交横スルモノヲ云フ

附則

第十二條 本令ハ陸軍防禦營造物ノ地帯及本法第七條第二項ノ區域ニ關聯セザル海軍防禦營造物ノ地帯及本法第七條第二項ノ區域ヲ除キ總テノ要塞地帯及本法第七條第二項ノ區域ニ關シテ之ヲ適用ス

第十三條 本令ハ本年八月二十日ヨリ施行ス但シ本法第七條ニ掲クル事項ニ關シテハ本令發布ノ日ヨリ施行ス

○要塞地帯法ニ規定スル要塞司令官ノ職務ニ關スル件 明治三十二年七月三十一日
陸令第三百五十八號

朕要塞地帯法ニ規定スル要塞司令官ノ職務ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

要塞地帯法ニ規定スル要塞司令官ノ職務ハ要塞司令部ヲ設ケサル地ニアリテハ警備隊司令官、衛戍司令官若ハ築城部支部長之ヲ行フ

○明治三十二年八月十一日
陸令第七十八號

2013

要塞地帯法施行ノ事ニ關シテハ要塞司令官ハ當該築城部支部長ニ命令ヲ下スニ
ト得但シ要塞司令官ノ職務ヲ行フ衛戍司令官ハ該支部長ニ協議スヘシ

○明治三十二年八月十一日
陸軍省告示第九號

要塞地帯法及其ノ附屬命令ニ規定スル要塞司令官ノ職務ハ對馬ニ在リテハ警備
隊司令官舞鶴國館吳ニ在リテハ當該衛戍司令官佐世保長崎鳴門ニ在リテハ當該
築城部支部長藝豫ニ在リテハ築城部忠海支部長之ヲ行フ

○明治三十二年十二月一日
陸軍省告示第十七號

要塞地帯法及其ノ附屬命令ニ規定スル要塞司令官ノ職務ハ鳴門、藝豫、佐世保及
長崎ニ在リテハ當該衛戍司令官之ヲ行フ

○明治三十二年八月十一日
陸軍省、海軍省告示

要塞地帯法第三條及第六條ニ依リ東京灣、吳、佐世保、舞鶴及對馬ニ於ケル陸軍
防禦營造物ノ地帯ヲ左圖實線以內同法第七條第二項ノ區域ヲ實線以外點線以內
トシ各區域ハ實地ニ標識ヲ設ケテ之ヲ表示ス(圖面略ス)

○明治三十二年八月十一日
陸軍省、海軍省告示

要塞地帯法第三條及第六條ニ依リ長崎ニ於ケル陸軍防禦營造物ノ地帯ヲ左圖實
線以內同法第七條第二項ノ區域ヲ實線以外點線以內トシ各區域ハ實地ニ標識ヲ
設ケテ之ヲ表示ス

同所ニ於ケル海軍防禦營造物ノ地帯ハ香燒島ノ北東部及其ノ附近海面トシ實地
ニ標識ヲ設ケテ之ヲ表示ス(圖面略ス)

○明治三十二年八月十一日
陸軍省告示第七號

要塞地帯法第三條及第六條ニ依リ下ノ關、國館、由良、鳴門及藝豫ニ於ケル陸軍
防禦營造物ノ地帯各區ヲ左圖實線以內トシ同營造物ニ關スル本法第七條第二項
ノ區域ヲ實線以外點線以內トシ各區域ハ實地ニ標識ヲ設ケテ之ヲ表示ス(圖面
略ス)

○明治三十二年八月十一日
陸軍省告示第八號

要塞地帯法第十九條ニ依リ各要塞地ニ於ケル禁止制限解除ノ事項及其ノ區域ヲ
改正加除(明治三十二年十一月)
陸軍省告示第十六號

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
<http://www.jacar.go.jp>

[illegible]

○國防用防禦營造物
出入規則

明治三十二年九月四日
陸達第八十六號

改正〔明治三十二年十月
加除〕陸達第四百四號

出入規則

國防用防禦營造物出入規則左ノ通定ム
但明治三十九年陸達第百三十號ヲ廢ス

國防用防禦營造物出入規則

第一條 陸軍ノ所管ニ係ル國防用防禦營造物ニ出入セントスル軍人軍屬ハ所

管長官ヲ經テ當該要塞司令官若ハ築城部本部長（要塞司令部未設増ニ限ル以下同シ）ニ其他ノ者ハ管轄長官ヲ經テ陸軍大臣ニ出願シ許可ヲ受クヘシ

第二條 陸海軍官衛長官ニ於テ公務ノ爲メ軍人軍屬ヲ防禦營造物ニ出入セシメ

シトスルトキハ當該要塞司令官若ハ築城部本部長ノ承認ヲ經ヘシ

前項ノ場合ニ於テ陸軍大臣並ニ參謀總長ニ在テハ高級尉官又ハ總務部長ヲシテ當該要司令官若ハ參謀總長ニ通報セムル第三條ノ場合ニ在ツ

元當該要案司令官若シテ築城部支隊長ニ通報セシムハ第三條ノ場合ニ在ツテハ當該兵支隊長ニモ通報セシム

第三條 第一條及第二條第一項ノ軍人軍屬ニシテ要塞司令部未設ノ箇所ニ於テ

兵器庫藥庫内(兵器彈藥ヲ格納シ)ノ觀覽ヲ要スルナキハ當該兵器庫本藏長ノ承認ヲ

兵器ヲ藥屋所（アルモノニ限ル）ニ賣買シ要ニナリトシテ當該兵器之屬長ノ所論シ

第一類 官制 官規

三〇九

經ヘシ

第四條 陸軍官衛長官ニ於テ公務ノ爲メ軍人軍屬ヲシテ防禦營造物ヲ測量シ又ハ其形狀ヲ攝影模寫セシメントスルトキハ陸軍大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第五條 職務ノ爲メ第一條第二條第三條ノ手續ヲ經テ防禦營造物ニ出入シ得ヘキ者左ノ如シ

陸軍大臣 陸軍次官 陸軍省軍務局長 同軍事課長 同砲、工兵及兵器課將校

教育總監 要塞砲兵監部將校 築城部本部將校 砲、工兵會議將校 大阪砲兵工廠將校 東京砲兵工廠提理 同検査官 同砲具製造所長 同所員 參謀總長 參謀本部次長 同部長及主務將校 海軍大臣 海軍次官 海軍省軍務局長 同軍事課長 海軍軍令部長 同次長 同第一局將校 職務上本條諸長官ニ隨行スル官僚

第六條 職務ノ爲メ第一條第二條第三條ノ手續ヲ經テ各所管内及當該要塞内ニアル防禦營造物ニ限リ出入シ得ヘキ者左ノ如シ

東京防禦總督 東京防禦總督部參謀長 同參謀

都督 都督部參謀長 同參謀

臺灣總督 臺灣總督府陸軍幕僚參謀長 同參謀 臺灣總督府海軍參謀長、

同參謀

師團長 師團參謀長 同參謀

要塞司令官 同參謀

兵器本廠將校 臺北砲兵工廠將校 築城部支部將校 要塞所在地兵器支廠

將校 要塞砲兵隊長

鎮守府司令長官 同司令官 同參謀長 同參謀 要港部司令官

水雷團長 水雷敷設隊司令

職務上本條諸長官ニ隨行スル官僚

特命檢閱使及ヒ隨行官僚ハ檢閲ヲ命セラレタル所管内ノ防禦營造物ニ限リ出入スルコトヲ得

第七條 防禦營造物ノ出入若ハ測量攝影模寫ノ許可ヲ與ヘタルトキハ陸軍大臣ハ高級副官ヲシテ當該要塞司令官若ハ築城部支部長(要塞司令部未設地ニ限リ以下同シ)ニ通報セ

シム

出入人員夥多ナル場合ニ在テハ要塞司令官若ハ築城部支部長ハ適宜取締法ヲ設クルコトヲ得

2018

第八條 防禦營造物ニ出入シ測量、攝影、摸寫セントスルモノハ先ツ要塞司令部
若ハ築城部支部ニ就キ出入又ハ測量券ヲ受ケ之ヲ監守或ハ衛兵ニ示シ其指導
ニ從フヘシ但シ第五條第六條ノ諸官及第二條第二項ニ依リ出入スルモノニ限
リ要スルハ築城部本部ニ就キ出入券ヲ受クルコトヲ得該券ハ所要終レハ直ニ
受領シタル官衙ニ返納スルモノトス

出入券ヲ交付シタルトキハ築城部本部長ハ其官職氏名ヲ該要塞司令官又ハ
築城部支部長ニ通報スルモノトス

第九條 砲、工兵會議議長ハ試驗其他技術上ノ實查ニ關シ所要ノ人馬ヲ防禦營
造物ニ出入セシメ又之ヲ測量、攝影、摸寫セシムルコトヲ得

砲兵工廠提理ハ試驗若ハ備砲ニ關シ所要ノ人馬ヲ防禦營造物ニ出入セシムル
コトヲ得

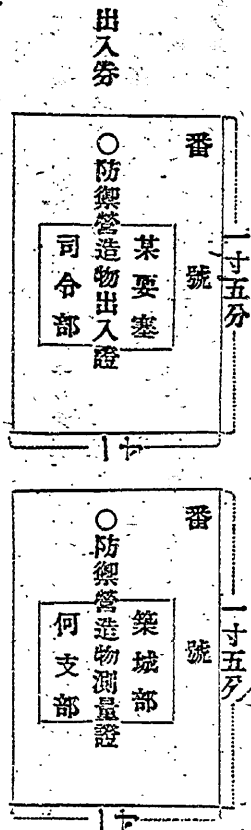
前二項ノ場合ニ在テハ先ツ要塞司令官又ハ築城部本部長ト商議シ且ツ適宜取
締法ヲ設クルモノトス

第十條 要塞司令官築城部本部長同支部長兵器本廠長及要塞所在地兵器支廠長
ハ職務上ノ必要ニ關シ前諸條(第八條)ノ手續ヲ經ス其部下官僚ヲシテ所管防禦
營造物ヲ測量、攝影、摸寫セシメ且所要ノ人馬ヲ出入セシムルコトヲ得

要塞砲兵隊長ハ當該防禦營造物ニ限リ前諸條(第八條)ノ手續ヲ經ス其部下將
校下士卒ヲ出入セシムルコトヲ得但シ演習其他ノ場合ニ於テ傭役者及馬匹ヲ
出入セシムル必要アルトキハ要塞司令官ノ許可ヲ經ヘシ要塞司令官未設ノ個
所ニ在ツテハ隊長責任ヲ以テ之ヲ處斷スルコトヲ得

第十一條 本則中要塞司令官及要塞司令官部トアルモノハ防禦營造物ノ設ケアル
島嶼ノ警備隊司令官及警備隊司令官ニ適用ス

第十二條 出入及測量券ハ要塞司令官、築城部本部同支部ニ置ク其様式ハ左ノ
如シ



木製ニシテ要塞司令部ニ置クモノハ「某要塞司令官」築城部支部ニ置クモノハ

「築城部何支部」ノ烙印ヲ爲ス

附則

第十三條 臺灣及澎湖島ニ在ルモノニシテ基隆、澎湖島ニ於ケル防禦營造物ニ出入セントスルモノハ要塞司令部設置ニ至ル迄第一條第二條第一項ニ準シ軍人軍屬ニ在ツテハ當該築城部支部長ノ許可若ハ承認ヲ受ケ其他ノモノハ臺灣總督ノ許可ヲ經ヘシ但シ第三條ノ場合ニ在ツテハ當該兵器支廠長ノ許可若ハ承認ヲモ受クルモノトス

○明治三十年十一月一日
陸軍省令第四十六號

天保山砲臺出入ニ關シテハ明治二十九年八月陸達第百三十號砲臺出入規則中要塞司令官並ニ司令部ノ施行スヘキ事項ハ當分ノ内大阪兵器本廠長並ニ同本廠ヲシテ取扱ヘシム

○明治三十二年八月十一日
陸軍省令第二十一號

本年當省告示第七號及陸海軍省告示要塞地帶各區内ニ於ケル新設及變更届出ノ件左ノ通定ム

第一條 本年當省告示第七號及陸海軍省告示要塞地帶ニ該當スル各區内（海軍ノ主管ニ屬スル分ヲ除ク）ニ於テ本年八月二十日以前ニ左ノ各號ニ掲クル物件ノ新設若クハ變更ニ著手シタルモノハ本年八月三十一日迄ニ所轄市町村長ノ證明ヲ受ケ當該要塞司令官ニ届出ヘシ但シ本年八月二十日以前ニ新設若クハ變更ヲ終ルヘキモノハ此ノ限ニアラス

一 不燃質物ヲ以テ築造スル家屋及倉庫
一 埋葬地

以上第一區及第二區内

一 密室及固定竈爐

一 不燃質物ヲ以テ築造セル高サ二尺ヲ超ニル諸般ノ築造物

一 水車及風車

一 井

一 容易ニ他ニ移動スヘカラサル器械器具ヲ備フル家屋

一 生垣及木造ノ圍牆

一 不燃質物ヲ以テ築造セル家屋及倉庫

一 高サ五尺以上ニ累積スル不燃質物及石炭類

2019

2020

一 高サ一丈三尺以上ニ累積スル薪炭及竹木屑

以上第一區内

一 不燃質物ヲ以テ築造セル高サ三尺ヲ超ユル諸般ノ築造物

一 高サ八尺以上ニ累積スル不燃質物及石炭類
一 高サ一丈七尺以上ニ累積スル薪炭及竹木材

以上第二區内

一 地表ノ高低ヲ永久ニ變更スル土工即チ堆土、開鑿等

一 溝渠、鹽田、排水及灌水
一 耕作地

一 堤塘、運河、道路、橋梁、鐵道、隧道、永久棧橋

以上三區内

第二條 前條ニ依リ届出ヲ爲ス者ハ土地及築造物等ノ位置、設計、築造物ノ材料及落成ノ期日ヲ明記スヘシ

第三條 府縣、郡市、町村、水利組合其他公共團體ノ作業ニ係ルモノハ前二條ニ準シ其代表者ヨリ届出ヘシ但シ市町村長ノ證明ヲ要セス

第四條 第一條ノ届出ヲ怠リタル者ハ二十五圓以内ノ罰金若クハ二十五日以下ノ禁錮ニ處ス

第五條 要塞司令部ノ設ナキ地ニ於テ本令ニ規定スル要塞司令官ノ職務ハ對馬ニ在リテハ警備隊司令官其ノ他ニ在リテハ衛戍司令官、衛戍司令官アラサルトキハ築城部支部長之ヲ行フ

第六條 本令中「不燃質物」及「道路橋梁」トアルハ本年當省令第二十二號ノ規定ヲ準用ス

附 則

第七條 本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

第八條 本年當省告示第八號ニ依リ家屋倉庫其他築造物等ノ新設變更ノ禁止制限ヲ解除シタル部分ニ於テ其ノ解除シタル事項ニ關シテハ本令ヲ適用セス

○陸軍國防禦營造物圖書取扱規則

明治三十二年九月一日
陸軍第八十五號

陸軍國防禦營造物圖書取扱規則別冊ノ通定

但シ明治二十五年陸軍第五十五號要塞堡壘砲臺圖書取扱規則ハ廢止ス

陸軍國防禦營造物圖書取扱規則

第一條 陸軍國防禦營造物圖書トハ要塞防禦計畫圖書、要塞地帯内ニ於ケ

第一類 官制 官規

三十三

ル陸軍ノ防禦營造物ニ關スル圖書及要塞近傍一萬分以上ノ梯尺圖(地形圖)ヲ謂フ該圖書ニハ軍事機密ノ四字、番號及保管者ノ職氏名ヲ標記ス

第二條 陸軍大臣、參謀總長、砲兵會議議長、工兵會議議長及築城部本部長ハ各其必要ト認ムル全國陸軍國防用防禦營造物圖書ヲ貯藏保管ス

第三條 東京防禦總督、都督、臺灣總督、師團長、警備隊司令官及兵器本廠長ハ其管内ニ於ケル陸軍國防用防禦營造物圖書中下付セラレタルモノ、外尙必要ト認ムルモノハ之レヲ貯藏保管スルコトヲ得

要塞司令官、築城部支部長、要塞所在地兵器支廠長、要塞砲兵聯隊(獨立)長ハ當該要塞ノ防禦營造物圖書中下付セラレタルモノ、外尙必要ト認ムルモノハ之ヲ貯藏保管スルコトヲ得

第四條 陸軍大臣及參謀總長ハ主務課長又ハ部長ニ陸軍國防用防禦營造物圖書ノ貯藏保管ヲ命ス

第五條 陸軍ノ國防用防禦營造物圖書ノ貯藏保管ハ各長官ノ責任ナリト雖トモ部下將校ヲ指定シテ其取扱ヲ爲サシムルコトヲ得

第六條 陸軍國防用防禦營造物圖書ヲ貯藏保管スル各長官ハ職務上必要ノ關係アル高等官ニ該圖書ノ閱覽ヲ許スコトヲ得

第七條 砲兵會議議長、工兵會議議長、築城部本部長同支部長及兵器本廠長同支廠長ハ陸軍國防用防禦營造物圖書ヲ謄寫スルコトヲ得

第八條 陸軍國防用防禦營造物圖書貯藏保管ノ責任アル各長官新ニ該圖書ヲ貯藏スルノ必要アルトキハ築城部本部長又ハ同支部長ニ商議シテ之ヲ謄寫スルコトヲ得但シ圖書ノ種類ニ由リテハ陸軍大臣ヨリ下付スルコトアルヘシ

第九條 前二條ニ依リ謄寫シタル圖書ニハ原圖書ト同一ノ標記ヲ爲シ其ノ下ニ「寫」ノ字ヲ記入スヘシ

第十條 陸軍國防用防禦營造物圖書ヲ貯藏保管スル各長官ハ毎年四月盡日調ヲ以テ該圖書ノ目錄(番號)ヲ製シ五月二十日迄ニ陸軍大臣ニ報告スヘシ

第十一條 陸軍國防用防禦營造物圖書ニシテ損傷使用ニ堪ヘサルモノ又ハ不用ニ屬セシモノハ陸軍大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ燒却スヘシ

第十二條 教官軍事機密圖書中ノ事項ヲ教授スル場合ニ在テハ其機密ナルコトヲ告知シタル後之ヲ口授シ筆記セシムルヲ許サス

第十三條 陸軍國防用防禦營造物圖書ヲ紛失又ハ燒失シタルトキハ直ニ最迅速ノ方法ヲ以テ陸軍大臣ニ報告シ更ニ其顛末並ニ處分ヲ詳報スヘシ

第十四條 陸軍國防用防禦營造物圖書ノ下付ヲ受ケタルモノハ直ニ其受領證書

2021

ヲ出スヘシ

第十五條 陸軍部外ニ於テ發行シタル國防用防禦營造物ニ關スル圖書モ亦本規則ニ準シ取扱フモノトス

○陸軍機密圖書取扱規則

明治三十二年七月十八日
陸達第七十號

陸軍機密圖書取扱規則別冊ノ通定ム
但明治三十年陸達第二百二十八號陸軍秘密圖書取扱規則ハ廢止ス

陸軍機密圖書取扱規則

第一條 軍事ニ關スル機密圖書ニハ一葉若クハ一冊毎ニ左ノ標記ヲ爲ス

一 軍事機密、發行廳名、年月日、一連番號(符號)保管者ノ職氏名

第二條 軍事機密圖書ヲ發行セントスル廳長ハ豫メ陸軍大臣ノ承認又ハ認可ヲ受クヘシ

第三條 機密圖書ハ發行廳長其取扱及出納ヲ監督ス

第四條 機密圖書ノ配布ヲ受ケタル長官ハ自ラ其保管者ト爲リ之ニ關スル業務ヲ執ル高等官ノ外之ヲ閱覽セシムルヲ禁ス但部下將校同相當官ヲ指定シテ之ヲ保管セシムルヲ得

第五條 戰時特設部隊ノ爲メニ要スル機密圖書ハ動員擔任官之ヲ保管スヘシ

第六條 機密圖書ハ各長官之ニ基キ訓令細則等ヲ作ルトキノ外總テ謄寫復刷若クハ拔萃スルヲ禁ス而シテ此訓令細則等ハ原圖書ト同一ナル標記及取扱ヲ爲スモノトス

第七條 敎官軍事機密圖書中ノ事項ヲ敎授スル場合ニ在テハ其機密ナルコトヲ告知シタル後之ヲ口授シ筆記セシムルヲ許サス

第八條 機密圖書ノ保存貸借授受等ニ關スル方法ハ各長官之ヲ定メ若シ紛失又ハ燒失シタルトキハ直チニ最迅速ノ方法ヲ以テ發行廳長ニ報告シ更ニ其顛末並ニ處分ヲ詳報スヘシ

第九條 機密圖書ノ配布ヲ受ケタルモノハ直チニ其受領證書ヲ出スヘシ

第十條 機密圖書ニシテ改正又ハ廢止ノ結果若クハ年度ノ變換等ニ因リ不用ニ歸スルトキハ一ヶ月以内ニ發行廳長ニ返付シ發行廳長ハ之ヲ燒却スルモノトス

第十一條 各長官ハ毎年四月盡日調ヲ以テ保管機密圖書ノ目錄(符號)ヲ製シ五月二十日迄ニ發行廳長ニ報告スヘシ

第十二條 軍事ニ關スル機密文書ハ本規則ニ準シ取扱フモノトス

第十三條 草案中ニ在ル機密圖書モ亦本規則ニ準シ取扱フモノトス但審議ノ職

2022

責アル長官ハ必要ニ應シ謄寫復刷若クハ拔萃セシムルコトヲ得
第十四條 國防用防禦營造物ニ關スル圖書及要塞近傍一萬分一以上ノ梯尺圖ハ
軍事機密圖書ニ屬スト雖モ其取扱ハ別ニ定ムル所ニ據ル

第十五條 陸軍部外ニ於テ發行シタル秘密圖書ニシテ陸軍機密圖書ト同一程度
ノ秘密ヲ要スルモノハ本規則ニ准シ取扱フモノトス

明治三十二年十二月廿五日
送乙第三六四五號

軍事機密範圍外ノ秘密圖書ニシテ改廢ノ結果不用ニ屬シタルモノ、義ハ自今改
廢同時ニ其處分方ヲ特ニ通達アルモノ、外總テ保管者ニ於テ焼却スル義ト承知
相成度此段及通牒候也

追テ焼却シタル書名並番號アル者ハ番號共留記シテ其官衙ニ保存スルコトニ
取計置有之度候也

明治三十一年四月一日
陸軍省送乙第一〇七〇號大官ヨリ

三十年十月送乙第三四〇六號ヲ以テ秘密圖書取扱方ニ付通牒書中要塞附近一萬
分一以上ノ梯尺圖モ第一種中ニ編入相成居候處右ハ極メテ秘密ヲ要スルモノニ
付該地圖ハ二十五年六月陸達要塞堡壘砲臺圖籍取扱規則ニ據リ取扱相成度此段
及通牒候也

○要塞近傍ニ於ケル水陸測 量等ノ取締ニ關スル件

明治三十一年七月二十七日
勅令第百七十六號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ要塞近傍ニ於ケル水陸測量等ノ取締ニ關スル件ヲ裁可
シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 要塞ニ於ケル各防禦營造物ノ周圍ヨリ外方五千七百五十間以内ノ水陸
ノ形状ヲ測量、模寫、撮影、筆記セムトスル者ハ豫メ當該要塞司令官ノ許可ヲ
受クヘシ

前項ノ區域内ヲ明治二十二年法律第十九號土地收用法第五條若ハ第七條ニ依
リ測量又ハ検査セムトスル者若ハ明治二十三年法律第八十七號鑛業條例第四
十七條ニ依リ測量セムトスル者ハ豫メ當該要塞司令官ニ届出ヘシ

前二項ノ場合ニ於テ測量、模寫、撮影、筆記ヲ爲スノ方法區域ハ當該要塞司令

2023

2024

官ノ指示ニ從フヘシ

第二條 官廳ニ於テ前條第一項ノ區域内ノ水陸ノ形狀ヲ測量、模寫、撮影、筆記セムトスルトキハ豫メ當該要塞司令官ノ承認ヲ受クヘシ

官廳ニ於テ前條第一項ノ區域内ヲ明治二十二年法律第十九號土地收用法第五條若ハ第七條ニ依リ測量又ハ検査セムトスルトキハ豫メ當該要塞司令官ニ通知スヘシ

前二項ノ場合ニ於テ測量、模寫、撮影、筆記ヲ爲スノ方法區域ハ當該要塞司令官ト協議シテ之ヲ定ムヘシ

第三條 前二條ノ規定ハ要塞ノ設ナシト雖之ヲ設クルコトニ決定シタル箇所ニ於テ其ノ豫定各防禦造營物ノ周圍ヨリ外方五千七百五十間以内ノ水陸ノ形狀ヲ測量、模寫、撮影、筆記スル場合ニモ之ヲ適用ス

第四條 第一條第一項及第三條ノ區域ハ陸軍大臣之ヲ告示ス

第五條 第一條各項ニ違犯シタル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮又ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三條ニ依リ第一條ヲ適用スル場合ニ於テ其ノ各項ニ違犯シタル者亦同シ
第六條 第一條第一項及第三條ノ區域ヲ表示スル爲ニ設ケタル標石、標木若ハ標札ノ類ヲ移轉シ若ハ毀壞シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ過失ニ出タル者ハ五圓以上一圓九十五圓以下ノ科料ニ處ス

附 則

第七條 第一條第二條第三條ノ規定ハ第四條ニ依リ陸軍大臣ノ告示シタル箇所ニ限リ之ヲ適用ス

第八條 本令ニ規定スル要塞司令官ノ職務ハ警備隊ヲ置キタル箇所ニ在リテハ警備隊司令官其ノ他要塞司令官在ラサル箇所ニ在リテハ其ノ地ノ衛戍司令官(衛戍司令官在ラサルハ警備隊支部長)之ヲ行フ

第九條 軍港要港規則ニ特ニ禁令アル事項ニ關シテハ本令ノ規定ヲ適用スルノ限ニ在ラス

第十條 本令ハ陸海軍官憲ニ於テ行フ測量、模寫、撮影、筆記ニ適用セス

○官吏服務紀律

明治二十年七月二十九日
勅令第三十九號

朕官吏服務紀律ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ施行セシム

官吏服務紀律

第一條 凡ソ官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシ法律命令ニ從ヒ各其職務ヲ盡スヘシ

第二條 官吏ハ其職務ニ付本屬長官ノ命令ヲ遵守スヘシ但其命令ニ對シ意見ヲ述ルコトヲ得

第三條 官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス廉耻ヲ重シ貪汚ノ所爲アルヘカラス

官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス威權ヲ濫用セス謹慎懇切ナルコトヲ務ムヘシ

第四條 官吏ハ己ノ職務ニ關スルト又ハ他ノ官吏ヨリ聞知シタルトヲ問ハス官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ禁ス其職ヲ退ク後ニ於テモ亦同様トス

裁判所ノ召喚ニ依リ證人又ハ鑑定人ト爲リ職務上ノ秘密ニ就キ訊問ヲ受クルトキハ本屬長官ノ許可ヲ得タル件ニ限り供述スルコトヲ得

第五條 官吏ハ私ニ職務上未發ノ文書ヲ關係人ニ漏示スルコトヲ禁ス

第六條 官吏ハ本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職務ヲ離レ及職務上居住ノ地ヲ離ルハコトヲ得ス

第七條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ營業會社ノ社長又ハ役員トナルコトヲ得ス

第八條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務ニ關シ慰勞又ハ謝儀又ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ直接ト間接トヲ問ハス總テ他人ノ贈遺ヲ受ルコトヲ得ス

官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給並贈遺ヲ受クルニハ天皇陛下ノ裁可ヲ要ス

第九條 左ニ掲ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ルノ官吏ハ其選任ヲ受クルコトヲ得ス

一 官廳ノ工事ヲ受負フ者

一 官廳ノ爲替方又ハ出納ヲ引受クル者

一 官廳ノ補助金ヲ受クル起業者

一 官廳ノ用品ヲ調達スル者

一 官廳ト諸般ノ契約ヲ結フ者

第十條 凡ソ上官タル者ハ職務ノ内外ヲ問ハス所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス

第十一條 官吏並ニ其家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ

2025

間ハス商業ヲ營ムコトヲ得ス
第十二條 官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス

第十三條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サルハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フコトヲ得ス

第十四條 浪費シテ產ヲ破リ其分ニ應セサル負債ヲ爲ス者ハ過失ノ一タルヘシ
第十五條 官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乗船無賃乘車切符ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 凡ソ局長所長其他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ其過失若シ懲戒處分ヲ行フノ區域ノ内ニ在ラサル者ハ之ヲ訓告スルコトヲ務ムヘシ若シ懲戒處分ヲ要スト認ルトキハ事狀ヲ具ヘテ之ヲ本屬長官ニ稟告スヘシ其情ヲ知リ隠蔽シテ稟告セサル者亦過失タルコトヲ免ル

第十七條 本紀律ハ高等官判任官及俸給ヲ得テ公務ヲ奉スル者ニ適用ス

明治三十二年一月二十四日
内閣訓令無効

凡ソ官吏タル者ハ自今其職務外ト雖モ公衆ニ對シ政事上又ハ學術上ノ意見ヲ演說シ又ハ之ヲ叙述スルコトヲ得但各長官ノ監督ニ從屬スヘシ
法律規則ヲ以テ特ニ制限セラレタル官吏ハ前項ノ限ニ在ラス

○文官懲戒令

明治三十二年三月二十七日
勅令第六十三號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ文官懲戒令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官懲戒令

第一章 總則

第一條 親任式ヲ以テ叙任スル官及法令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外官吏ハ本令ニ依ルニ非サルハ懲戒ヲ受クルコトナシ

第二條 官吏ノ懲戒ヲ受クヘキ場合左ノ如シ

- 一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ
- 二 職務ノ内外ヲ問ハス官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第三條 懲戒ハ左ノ如シ

- 一 免官
- 二 減俸
- 三 譴責

第四條 免官ノ處分ヲ受ケタル者ハ其ノ官職ヲ失ヒタル日ヨリ二年間官職ニ就
クコトヲ得ス

免官ノ處分ヲ受ケ其ノ情重キ者ハ位記ヲ返上セシム

第五條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額若ハ月俸ノ三分一以下ヲ減ス

第六條 勅任官ノ免官及減俸ハ懲戒委員會ノ議決ヲ具シ内閣總理大臣之ヲ奏請
シ奏任官ノ免官ハ懲戒委員會ノ議決ヲ具シ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官之ヲ
奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行フ

奏任官ノ減俸及判任官ノ免官及減俸ハ懲戒委員會ノ議決ニ依リ本屬長官之ヲ
行フ

譴責ハ本屬長官之ヲ行フ

第七條 懲戒ニ付セラルヘキ事件刑事裁判所ニ繫屬スル間ハ同一事件ニ對シ懲
戒委員會ヲ開クコトヲ得ス

懲戒委員會ノ議決前懲戒ニ付スヘキ者ニ對シ刑事訴訟ノ始マリタルトキハ事
件ノ判決ヲ終ヘルマテ懲戒委員會ノ開會ヲ停止ス

第二章 懲戒委員會

第一款 總則

第八條 懲戒委員會ヲ分テ文官高等懲戒委員會及文官普通懲戒委員會トス

第九條 文官高等懲戒委員會ハ高等官ノ懲戒ヲ議決シ文官普通懲戒委員會ハ判
任官ノ懲戒ヲ議決ス

第二款 文官高等懲戒委員會

第十條 文官高等懲戒委員會ハ委員長一人委員六人ヲ以テ組織ス

第十一條 委員長ハ樞密顧問官ノ中ヨリ委員ハ行政裁判所長官、勅任行政裁判
所評定官、勅任判事及其ノ他ノ勅任文官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ
之ヲ命ス

委員會ニ豫備委員六人ヲ置キ前項ノ例ニ依リ之ヲ命ス

第十二條 委員會ハ委員長及委員ヲ併セ五人以上出席スルニ非ザレハ會議ヲ開
クコトヲ得ス

委員會ノ議事ハ多數ニ依リ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ委員長之ヲ決ス

第十三條 委員長事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

委員中事故アルトキハ又ハ副員アルトキハ委員長ハ豫備委員ノ中ヨリ代理ヲ命
ス

第十四條 委員及豫備委員ノ任期ハ三年トス

委員及豫備委員中關員アリテ補闕ノ爲任命セラレタル者ハ前任者ノ殘任期間
在任ス

第十五條 委員長及委員ハ左ノ事項ニ該當スルトキハ之ヲ免ス

一 其ノ官職ヲ失セタルトキ

二 委員會所在地以外ニ任所ヲ轉シタルトキ

第十六條 委員會ニ幹事一人ヲ置ク

第十七條 幹事ハ高等官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

第十八條 幹事ハ委員長ノ命ヲ承ケ委員會ノ議事ヲ準備シ庶務ヲ統理ス

第十九條 委員會ニ書記三人ヲ置ク

第二十條 書記ハ判任官ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第二十一條 書記ハ幹事ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三款 文官普通懲戒委員會

第二十二條 文官普通懲戒委員會ハ左ノ各官廳ニ之ヲ置ク

一 内閣

一 樞密院

一 各省

一 臺灣總督府

一 會計検査院

一 行政裁判所

一 警視廳

一 北海道廳

一 府縣

一 臺灣ノ縣及廳

一 貴族院事務局

一 衆議院事務局

前項ノ外各省大臣ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ所轄官廳ニ文官普通懲
戒委員會ヲ置クコトヲ得

第二十三條 委員長ハ各官廳ノ長官ヲ以テ之ニ充ツ但シ内閣ニ在テハ法制局長

官、樞密院ニ在テハ書記官長、各省ニ在テハ次官ヲ以テ之ニ充ツ

委員ハ二人乃至六人トシ當該官廳高等官ノ中ヨリ本屬長官之ヲ命ス但シ内閣

ニ在テハ賞勳局、法制局及内閣所屬高等官ノ中ヨリ之ヲ命ス

第二十四條 委員會ハ委員長及委員二人以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコ

トヲ得ス

第二十五條 委員長事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

第二十六條 委員會ニ書記二人ヲ置ク

第二十七條 書記ハ委員長所屬官廳ノ判任官ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第二十八條 書記ハ委員長ノ命ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第三章 懲戒手續

第二十九條 本局長官ハ所屬ノ官吏ニシテ懲戒ニ當ルヘキ所爲アリト認ムル
トキハ證據ヲ具ヘ書面ヲ以テ懲戒委員會ノ審査ヲ要求スヘシ

第三十條 前條ノ要求アリタルトキハ委員長ハ期日ヲ定メテ委員會ヲ招集スヘ
シ

委員會ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ本人ノ出頭ヲ命スルニトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ本人所屬官廳ヨリ内國旅費規則ニ依リ本官相當ノ旅費ヲ
給スヘシ

第三十一條 委員會ニ於テ議決ヲ爲シタルトキハ其ノ理由ヲ具シ本局長官ニ覆
申スヘシ

第三十二條 委員長及委員ハ自己又ハ其ノ親族ニ關スル事件ノ會議ニ參與スル
コトヲ得ス

第三十三條 委員會ノ審査手續ハ委員會之ヲ定ム
附 則

第三十四條 高等官試補ハ高等官ニ準シ判任官見習ハ判任官ニ準シ本令ヲ適用
ス

第三十五條 本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス
官吏懲戒例ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○長官懲戒處分心得

明治九年四月
番外添

今般官吏懲戒例相定候ニ付テハ各長官ニ於テ懲戒處分左ノ通可相心得此旨内達
候事

長官懲戒處分心得

- 一 各長官ハ平生其所屬官ヲ監督シ、若シ過失アレハ懲戒例ニ依リ處分スヘシ
- 一 過失トハ過誤失錯不注意ニ出ル者ヲ云、其怠惰ニ出ル者亦過失トス、其素
行脩マラスシテ官吏ノ體面ヲ汚ス者、亦過失ニ準シテ懲戒ヲ加フヘシ
- 一 過失ノ事ニ害アル者ハ、重キニ從テ論ス、其事ニ害アリト云テ猶ホ改正ス

- （キ者、及ヒ事ニ害ナキ者ハ、輕キニ從テ論ス、但シ其情狀ニ從ヒ輕重ヲ酌量スルハ、專ラ本廳長官ノ所見ニ任ス）
- 一 同僚ノ官吏、共同シ過失ヲ犯ス者ハ、主任ノ上官（省務ハ省長、寮事務ハ寮司長、廳務ハ廳長、一科一局一掛ノ事務ハ、各々其主任長）其責ニ任スヘシ、而シテ次官以下、遞ニ從テ以テ論ス、上官其造意ヲ以テ處行シ、猶ホ上官ノ許可ヲ得タル者ハ、上下官共ニ均ク其責ニ任スヘシ、下官職權内ノ事ヲ以テ處行シタル者ハ、上官、其責ニ任セス、若シ下官其職權ヲ越ニ、專斷處行シタル者ハ、重ニ從テ論ス
- 一 所屬官自ラ過失ヲ覺悟シ、進退伺テ捧ケル下モ、本廳長官、之ヲ推糾シ、其過失ニ止マル者ハ、例ニ依リ處分ス、其有心故造ニ涉リ司法官ニ付スヘシトスル者ハ、懲戒例第十條ニ依リ、長官ヨリ之ヲ司法官ニ移ス、（司法官ニ移スハ、其事ハ本廳長官ノ裁可ニ任ス）若シ司法官其有心故造ニ非ス又律ニ觸レサルコトヲ判スルトキハ、之ヲ本廳長官ニ還付シ、長官ハ仍ホ懲戒例ニ依リ處分スルコトヲ得
- 一 懲戒ニ依リ免職スル者ハ、二ケ年以上ヲ經ルノ後ニ非サレハ、再び收用スルコトヲ許サス
- 一 懲戒ニ依ルト否トヲ論セス、凡ソ免職スル者ヲ他ノ官官職ヨリ收用セントスルハ、必ス舊本廳長官ニ通牒シテ、其意見ヲ問ヒ答復ヲ得ヘシ
- 一 過失ニ由ラスシテ免職スル者ハ、長官ヨリ旨ヲ諭シ辭表ヲ捧ケシム、其旨ニ違ヒ辭表ヲ捧ケサル者ハ、直チニ免職スルコトヲ得
- 一 舊任中過失アル者、轉任ノ後、發覺、若クハ自ラ覺悟スル者ハ、舊任本廳長官ト通牒シテ新任本廳長官ヨリ之ヲ懲戒スヘシ

○ 明治三十二年六月十六日
陸軍省令第一七六一號

文官懲戒令ニ關シ別紙第一〇七二號之通内閣書記官長ヨリ通牒有之候條此段及御通牒候也

（別紙）

第一〇七二號

文官懲戒令ニ關シ左ノ通内閣決定相成候間此段及御通牒候也

明治三十三年六月十三日

内閣書記官長ヨリ

陸軍次官宛

一 文官懲戒令ヲ適用ス可カラサル待遇官吏及雇員等ノ懲戒ニ關シテハ内閣

ニ於テ別段其規定ヲ設ケス本局長官ノ見込ヲ以テ適宜処分スルコト
一 懲戒免官ノ者二年間ハ官職ニ就カシムルコトヲ得サルハ勿論其期限内ニ
於テ待遇官吏又ハ雇員ニモ採用スルコトヲ得ス

○陸軍軍人軍屬ハ官吏 明治九年五月二十三日
懲戒例ニ該當セス 陸軍省達第九十號

先般太政官第三十四號ヲ以テ官吏懲戒例御達相成候處陸軍軍人軍屬之儀ハ右例
ニ不該儀ト可相心得此旨相達候事

○陸軍軍屬中判任官以上 明治二十一年五月三日
ノ文官懲戒ノ件 陸軍省達乙第一五一號

去明治九年太政官第三十四號ヲ以テ官吏懲戒例御達相成同年五月中達乙第九十
號ヲ以テ陸軍軍人軍屬ノ義ハ右例ニ不該儀ト可心得旨相達候其趣意ハ軍人ヲシ
テ一般官吏ト同シク懲戒例ニ該テ懲戒セシムル義ハ實際難被行ニ依レハナリ其
後十四年達乙第七十三號ヲ以テ陸軍懲罰令制定相成候ニ付官吏懲戒例ハ陸軍ニ
在テハ益必要ナキ姿ニ有之候處軍屬中判任官以上ノ文官ニシテ懲戒上免官スヘ
キモノ有之節ハ陸軍懲罰令中該目無之差支有之ニ付懲戒例ニ依リ處分候外無之
依テ文官ニシテ懲戒上免官ヲ以テ處分スヘキ者ニ限リ九年達乙第九十號達ニ不
拘官吏懲戒例ヲ併用處分スル義ニ有之候條爲心得此旨及内訓

○陸軍懲 明治十四年十二月二十八日
罰令 達乙第七十三號

明治十八年八月	達乙第一二一號
明治二十一年八月	勅令第六三號
明治二十二年四月	勅令第一一八號
明治二十七年七月	勅令第九三號
明治二十九年四月	勅令第一二二號
明治三十二年一月	勅令第十四號

陸軍懲罰令別冊之通被相定候條此旨相達候事
但來明治十五年一月一日ヨリ施行可致儀ト可相心得事

(別冊)

陸軍懲罰令

第一章 法例

第一條 此令ハ軍人ノ故意疎虞懈怠過失ノ輕犯ニシテ刑法ニ該ラサル者及ヒ素
行修マラス軍人ノ體面ヲ汚ス者アル時上官之ヲ懲戒スルノ罰典トス但他ノ法
律規則ニ依テ論ス可キ者ハ各其法律規則ニ從フ

第二條 各所管ノ長官軍團長師團長旅團長及ヒ衛戍司令官ハ部下ノ軍人此令ヲ
犯ス者アル時之ヲ罰ス可シ

第三條 各軍隊ノ隊長ハ左ノ區別ニ從テ處分ス可シ

一 聯隊長ハ部下ノ軍人三十日以内ノ謹慎營倉

二 大隊長ハ部下ノ士官十日以内ノ謹慎下士二十日以内ノ營倉兵卒三十日以内ノ營倉

三 中隊長ハ部下ノ下士十日以内ノ營倉兵卒二十日以内ノ營倉

獨立若クハ分屯ノ大隊長及憲兵隊長ハ第一項ニ獨立若クハ分屯ノ中隊長及分

遣隊長タル中少尉並ニ憲兵分隊長ハ第二項ニ軍樂隊長ハ第三項ニ同シ

第四條 前條ニ掲クルモノ、外ハ左ノ區別ニ從ツテ處分スヘシ

一 將官並ニ獨立ノ職ニ在ル上長官ハ前條第一項ニ同シ

二 獨立セサル職ニ在ル上長官並ニ獨立ノ職ニ在ル士官ハ前條第二項ニ同シ

三 獨立セサル職ニ在ル士官ハ前條第三項ニ同シ

四 前各項ノ場合ニ於テ將官又ハ上長官ヲ以テ充ツル職ニ在ルモノハ將官、

上長官又ハ士官ヲ以テ充ツル職ニ在ルモノハ上長官、士官又ハ准士官ヲ

以テ充ツル職ニ在ルモノハ士官ニ同シ

五 一時限リ部下ニ屬シ又ハ指揮下ニ屬スルモノ、懲罰ハ前條並ニ本條ニ同

第五條 前二條ニ因リ處分ヲ爲シタル時ハ各秩序ニ從ヒ其屬スル所ノ上官ニ申

報ス可シ若シ其犯行權限外ノ日數ニ該ル者ト認ル時ト雖モ先ツ其權限ニ從テ

之ヲ處分シ意見ヲ附シテ申報ス可シ

申報ヲ受ケタル隊長長官ハ各權限ニ從ヒ其罰ヲ變更シ若クハ日數ヲ増加スル

コトヲ得

第六條 削除

第七條 甲所ニ於テ此令ニ掲クル犯行アル者未タ處分ヲ經スシテ乙所ニ轉スル

時ハ甲乙互ニ通議シ乙所ニ於テ處分ス可シ

第八條 此令ニ掲クル所ノ犯行二箇以上俱ニ發スル時ハ各其罰ヲ科ス但一所爲

二箇以上ノ犯行ニ觸ル、時ハ其一ヲ科ス

第九條 軍屬及陸軍所屬ノ諸生徒此令ヲ犯ス者アルトキハ軍人ト同ク處分ス可

シ但軍屬高等官ハ將校ニ判任官ハ下士ニ諸生徒其他ノ者ハ諸卒ニ準シテ處分

ス

第十條 戰時若クハ事變ノ際ニ在テハ第三條ノ諸官ハ處罰中ノ者ニ裁罰ノ儘服

務ヲ命スルコトヲ得但此場合ニ於テハ服務中ノ期日ヲ處罰日數ニ通算ス

第十一條 裁罰服務中特ニ功績若クハ勤勞アル者ハ第三條ノ諸官其處罰ヲ免シ

若クハ之ヲ輕減スルコトヲ得

第三章 罰令

第十二條 將校及ヒ同等官ニ科ス可キ罰目

一 重謹慎

二 輕謹慎

第十三條 下士ニ科ス可キ罰目

一 重營倉

二 輕營倉

第十四條 諸卒ニ科ス可キ罰目

一 重營倉

二 輕營倉

第十五條 謹慎ハ勤務ヲ停メ他出及ヒ外人ト接見通信スルコトヲ禁ス其日數ハ一日以上三十日以下ト爲ス

重謹慎ハ俸給ノ半額ヲ減シ輕謹慎ハ其四分ノ一ヲ減ス

第十六條 謹慎限内疾病アレハ醫ヲ延クコトヲ許シ水火等ノ災害アル時ハ防救

遷徙スルコトヲ許ス

第十七條 下士上等兵廬第十一條第十二條ノ處分ヲ受ケ仍ホ悔改ノ狀ナク部

下ノ儀表ニ堪ヘサル者ハ其官職ヲ免ス但兵役ハ之ヲ免セス其官職ヲ免シタル

者悔改ノ効アルトキハ之ヲ免シタル日ヨリ六月ノ後之ヲ復スルコトヲ得

官職ヲ免シ又ハ之ヲ復スルハ近衛都督師團長若クハ之ト同等以上ノ權アル長

官ニ於テ之ヲ爲ス

第十八條 重營倉ハ演習ノ外勤務ヲ停メ營倉ニ銅シ唯飯及湯、鹽ヲ給シ寢具ヲ

一貸與セサルヲ例トシ其日數ハ一日以上三十日以下トス但七十二時ノ内ニ二十

四時間ハ輕營倉ニ移ス可シ

重營倉中天候若クハ疾病等ニ依テ醫官其必要ヲ證認スルトキハ寢具ヲ貸與ス

ルコトヲ得

第十九條 輕營倉ハ演習ノ外勤務ヲ停メ營倉ニ銅ス其日數ハ一日以上三十日以

下ト爲ス

第二十條 營外居住ノ者ヲ營倉ニ處スル時ハ囚獄ノ監倉ニ於テ之ヲ行フ

第二十一條 重營倉ニ處スル時營内居住ノ者ハ俸給十分ノ八ヲ減シ營外居住ノ

者ハ其半額ヲ減ス

輕營倉ニ處スル時營内居住ノ者ハ俸給十分ノ六ヲ減シ營外居住ノ者ハ其四分

ノ一ヲ減ス

第二十二條 「第二十五條」ニ掲タル所ノ犯行疎虞懈怠若クハ過失ニ係ル者ハ輕

謹慎輕營倉ニ處シ其故意ニ係ル者ハ重謹慎重營倉ニ處ス

第二十三條 營倉ニ處ス可キ者下士上等卒諸生徒及ヒ營外居住ノ者ナル時ハ禁

足ニ在營兵卒ナル時ハ苦役ニ換フルニトヲ得

禁足苦役ニ處スル時其日數ハ重營倉ノ一日ヲ三日ニ輕營倉ノ一日ヲ二日ニ折

算ス

禁足苦役ニ處スル時營内居住ノ者ハ其條給十分ノ二ヲ減ス

第二十四條 禁足ハ勤務演習ノ外營外ニ出ルコトヲ禁ス

營外居住ノ者ハ勤務演習ノ外他出ヲ禁ス但水火災疾病等アル時ハ此限ニ在ラス

第二十五條 苦役ハ勤務演習ノ外營外ニ出ルコトヲ禁シ雜役ヲ執ラシム

第二十六條 諸卒ハ犯行ノ情狀ニ因リ罰限滿ルノ後三十日以内仍ホ其佩劍ヲ禁

スルコトヲ得

第三章 犯行

第二十七條 犯行ノ款目左ノ如シ

一 職務ノ權限ヲ誤ル者

二 訓導ノ道ヲ失フ者

三 上申下達其他定期アル時日ヲ稽緩スル者

四 文書計算ヲ誤ル者

五 命令ヲ誤リ若クハ之ヲ誤リ傳フル者

六 物件ノ調製貯藏運搬支給ヲ誤ル者

七 職役若クハ屯營本隊ヲ離ル、者

八 他方ニ赴キ歸著ノ期ニ後ル、者

九 行軍ニ際シ發程及ヒ乘艦ノ期ニ後ル、者

十 召集ノ期ニ後ル、者

十一 受寄ノ財物若クハ借用物ヲ典却スル者

十二 官物ヲ擅用スル者

十三 法則命令ヲ遵奉セス若クハ之ヲ誹謗スル者

十四 罵詈侮慢若クハ鬭爭スル者

十五 暴行脅迫スル者

十六 猥褻ニ劔ヲ拔ク者

十七 酩酊シテ事ヲ省セサル者

第一編 官制 官規

三二七

- 十八 言語所爲詐僞ニ渉ル者
 十九 疾病事故ニ託シ勤務演習ヲ免レントスル者
 二十 抗言特頑從順ノ道ヲ失フ者
 二十一 犯罪アルヲ知テ之ヲ曲庇スル者
 二十二 勤務演習集合ノ期ニ後レ若クハ之ヲ缺キ若クハ之ヲ懈ル者
 二十三 服裝法ニ違フ者
 二十四 敬禮ヲ闕ク者
 二十五 官給ノ物件措置拭拂法ニ違フ者
 二十六 物件ヲ誤毀遺失若クハ汚損スル者
 二十七 失言過語若クハ應答ノ事理ヲ誤ル者
 二十八 軍人ノ態度ヲ失フ者
 三十九 上ニ掲クル犯目ノ外素行修マラサル者

○ 明治十五年二月二十三日
 陸軍部第五十五號

新懲罰令罰期計算ノ儀ハ受罰ノ日ハ時間ヲ論セス一日ニ算入シ放免ノ日ハ罰期ニ算入セサル儀ト可相心得此旨相達候事

○ 明治十五年三月二十二日
 水東第一一九號

下副官ノ犯罪ニシテ懲罰ニ該ル者ハ總テ士官ニ準シ取扱フヘキ儀ト可相心得此旨相達候事

○ 明治二十一年八月三十日
 陸軍部第七十三號

陸軍懲罰令第十五條ニ當ル者ノ取扱方左ノ通定ム

- 一 懲罰令第十五條ニ依リ官職ヲ免シ又ハ之ヲ復スルトキハ中隊長若クハ直屬ノ長官ヨリ順序ヲ經テ近衛都督師團長若クハ之ト同等以上ノ權アル長官ニ具狀ス可シ
- 一 官職ヲ免シ又ハ之ヲ復スルトキハ其申渡書ヲ聯隊長若クハ之ト同等ノ懲罰權アル長官ニ下シ申渡ヲ爲サシム可シ
- 一 其官職ヲ免シ卒トナル者兵卒中一二等アルモノハ一等卒ト爲シ一二等級アルモノハ一等給ヲ支給ス

○ 明治十七年四月二日
 達乙第二十三號發率 (全文ハ刑部ノ部ニ掲ク)

懲罰處分ヲ爲スニ當リ犯人ヲ營倉ニ留置シ若クハ勤務ヲ停止スルコトヲ要スル

2035

ルハ其權ヲ有スル者之ヲ命スルコトヲ得ヘシ
但其權ヲ有スル者現在セサル場合ニ在テハ犯人ヨリ上級ノ者假リニ之ヲ命ス
ルコトヲ得可シ

明治三十年四月七日
陸軍第四十七號

陸軍懲罰令ニ依リ處分シタル者ニシテ現役満期又ハ召集解除ノ際其罰期中ニ在
ル者ノ取扱左ノ通定ム

一 現役満期又ハ召集解除ノ際重營倉輕營倉罰期中ニ在ル者ハ其満期若クハ
解除ノ際罰文ト共ニ諸部團隊長ヨリ衛戍司令官ニ引渡シ同官ハ之ヲ衛戍
監獄ニ錮セシムヘシ但衛戍監獄ナキ地ニ在テハ衛戍司令官又ハ屯田兵隊
長其地ノ營倉ニ錮シ之ニ要スル費用ハ其師管ノ衛戍監獄ニ在テハ
支辨トシ滿期歸郷旅費ハ原隊ノ費用ニ屬ス

二 監獄又ハ營倉ニ錮シタル者ハ諸部團隊長ヨリ其由ヲ本籍地所管聯隊區司
令官ヲ經テ市町村長、屯田後備役兵村監視、東京市京都市大阪市及市制町
村制ヲ施行セサル地方ニ在テハ區戸長及之ニ準スヘキ者ニ通知スヘシ

明治三十一年七月八日
陸軍第六十七號

隊伍ニ編入シ在ル豫備役屯田兵ヲ召集期日以外ニ於テ陸軍懲罰令ニ依リ營倉ニ
處スルトキハ其ノ隊ノ營倉ニ錮シ之ニ要スル費用ハ札幌衛戍監獄ノ支辨トス

明治二十七年三月二十一日
陸軍省送乙第五二〇號

別紙肆第三一六號第一師團長申請ニ對シ朱書ノ通指令相成候條爲御心得此段及
御通牒候也

相第六五號

陸軍監獄看守ノ儀ハ客年勅令第四百十二號ニ依リ本年四月一日ヨリ判任待遇ト
相成又同年勅令第四百七十五號ニ依リ陸軍所屬特別文官俸給令ヲ以テ俸給等被定
候就テハ懲罰ハ陸軍懲罰令第九條ニ準スヘキモノ、如クナルモ身分ハ所謂判任
待遇ニシテ判任官ト云フヲ得ス判任官ハ同條ニ依リ下士ニ準スヘキモ陸軍監獄
看守ノ如キ判任待遇ノ輩ハ同條諸卒ニ準シ處分可然裁權限上ニモ關係候間至急
何分御指示相成度此段及申請候也

(朱書)

申請之趣下士ニ可準義ト心得ヘシ

明治二十七年三月二十一日

明治三十一年三月 勅令第三四號
 (明治三十一年四月一日施行)
 明治三十二年三月 勅令第五三號
 (附則)
 本令ハ明治卅三年四月一日ヨリ施行
 明治卅二年五月 勅令第二二〇號

○

2037

第一類
官制
官規

上 332 ~ 333

部 隊 號	所 在 地 名
騎兵第一聯隊	東京府荏原郡世田ヶ谷村
近衛野戰砲兵聯隊	同府同郡駒澤村
野戰砲兵第一聯隊	同府北豐島郡岩淵町大字元袋村
近衛工兵大隊	同府荏原郡目黒村
工兵第一大隊	同府豊多摩郡中野村
近衛輜重兵大隊	愛知縣東春日井郡二城村大字守山
鐵道大隊	大阪府東成郡清堀村
步兵第三十三聯隊	名古屋
騎兵第四聯隊	大阪府
步兵第十九旅團司令部	伏見
步兵第三十八聯隊	京都府紀伊郡深草村
步兵第二十一聯隊	滋田
步兵第二十一旅團司令部	山口縣吉敷郡上宇野令村
步兵第四十二聯隊	同縣同郡宮野村
野戰砲兵第六聯隊	熊本縣飽託郡大江村
工兵第六大隊	鹿兒島縣鹿兒島郡伊敷村
步兵第四十五聯隊	鹿兒島
第八師團司令部	青森縣中津輕郡清水村
步兵第三十一聯隊	弘前
輜重兵第八大隊	同縣同郡堀越村
騎兵第八聯隊	
工兵第八大隊	
步兵第三十五聯隊	

第一類 官制 官規

三三三

2041

騎兵第九聯隊 野戰砲兵第九聯隊 工兵第九大隊 輜重兵第九大隊	步兵第十八旅團司令部 步兵第十九聯隊	步兵第三十六聯隊	騎兵第十聯隊 野戰砲兵第十聯隊 輜重兵第十大隊	步兵第四十聯隊	步兵第二十旅團司令部 步兵第二十聯隊 工兵第十大隊	第十一師團司令部 第二十二旅團司令部 輜重兵第十一大隊	步兵第四十三聯隊 騎兵第十一聯隊 野戰砲兵第十一聯隊 工兵第十一大隊	步兵第四十四聯隊	步兵第四十七聯隊 騎兵第十二聯隊 野戰砲兵第十二聯隊 工兵第十二大隊 輜重兵第十二大隊
金澤	敦賀	鯖江	姫路	鳥取	福知山	九龍	高知	小倉	
石川縣石川郡野村字野田	福井縣敦賀郡栗野村	同縣丹生郡立待村大字糺野 今立郡神明村	兵庫縣飾磨郡城北村	鳥取縣岩美郡稻葉村	京都府天田郡曾我井村	香川縣多度郡麻野村	同縣同郡善通寺村	高知縣土佐郡朝倉村	福岡縣企救郡東紫村大字北方

步兵第二十四旅團司令部	久留米	福岡縣三井郡國分村
步兵第四十八聯隊		
獨立歩兵大隊	札幌	北海道札幌郡月寒村
獨立野戰砲兵大隊		
獨立工兵中隊		
由良要塞砲兵聯隊門分屯隊	鳴門	兵庫縣三原郡福良町
吳要塞砲兵聯隊	吳	廣島縣安藝郡廣島市段原村
佐世保要塞砲兵聯隊長崎分屯隊	長崎	長崎縣西彼杵郡竹久保郷
函館要塞砲兵大隊	函館	渡島國龜田郡龜田村
舞鶴要塞砲兵大隊	舞鶴	京都府加佐郡餘内村